常陸大宮
姥賀遺跡

日立造船㈱大宮町姥賀単身寮建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大宮町教育委員会
平成4年1月

例　　言

1　本書は茨城県那珂郡大宮町字姥賀2993－3ほかの日立造船株式会社大宮町姥賀単身寮建設に伴う埋蔵文化財の遺構有無確認調査および発掘調査の報告書である.

2　確認調査は，平成3年2月21日より2月27日までの7日間，発掘調査は平成3年4月5日より4月17日までの合計17日間行った.

3　調査は，千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし，水谷正，飯島栄子を調査補佐員に加え，地元作業員の協力を受けて実施した.

4　遺構，遺物の写真は，千種重樹が撮影したものを使用した.

5　遺物の整理および報告書の作成作業は，調査終了後より平成3年11月30日まで行った.

6　整理作業は，主として下記の分担で行った.

千種　重樹（遺構図作成，土器・石器実測図，トレース，写真図版，本文執筆，レイアウト）

飯島　栄子（遺物の水洗い，注記，土器接合）

田村みどり（遺構図および土器実測図のトレース，記号・番号貼付）

7　出土遺物は，大宮町教育委員会に一括保管されている.

実測図凡例

1　出土遺物の種類は次の記号で区別した.

●土師器　　○須恵器　　▲自然石　　△石器　　□鉄製品

2　接合資料は，出土地点番号（遺物番号と同一），表裏関係（表△・裏▽・立ち▷），床上レベル（計測単位cm）の順で記載した.

3　遺物実測図で，土師器のうち網点を施した部分は内面黒色処理を意味し，還元焔で焼成した須恵器は断面を墨で塗りつぶして区別した.

本 文 目 次

例　言
実測図凡例
本文目次
挿図目次
図版目次
第 一 章　発掘調査に至る経過 …… 1
第 二 章　遺跡の位置と考古学的環境 …… 2
第 三 章　確認調査（試掘）の概要 …… 4
第 四 章　発掘調査の概要 …… 11
　第一号住居址 …… 11
　第二号住居址 …… 15
　掘立柱建物跡 …… 21
第 五 章　まとめ …… 24
発掘作業従事者・整理報告書作成従事者

挿 図 目 次

第 一 図　遺跡位置図・周辺地形図（○印　姥賀遺跡）…… 3
第 二 図　調査区トレンチ設定図 …… 5
第 三 図　トレンチ土層断面図 …… 7～8
第 四 図　トレンチ配置図・遺構分布図 …… 9～10
第 五 図　第一号住居址実測図・遺物出土状態図 …… 13
第 六 図　第一号住居址カマド実測図 …… 14
第 七 図　第一号住居址出土土器・鉄製品実測図 …… 15
第 八 図　第二号住居址実測図・遺物出土状態図 …… 17
第 九 図　第二号住居址カマド実測図 …… 18
第一〇図　第二号住居址出土土器実測図・拓影図 …… 19
第 一 図　第二号住居址出土土器・石器実測図 …… 20
第一二図　掘立柱建物跡実測図 …… 22
第一三図　掘立柱建物跡柱穴実測図 …… 23
表　　1　柱穴一覧表 …… 23

図 版 目 次

図版第一　遺跡の現状＜西側より＞

遺跡の現状＜東側より＞

図版第二　第1トレンチの発掘状況＜西側より＞

第3トレンチの発掘状況＜西側より＞

図版第三　第1トレンチ全景＜西側より＞

第1トレンチ第4区A－Bセクション土層断面＜南西より＞

図版第四　第2トレンチ全景＜西側より＞

第2トレンチ第1区C－Dセクション土層断面＜南西より＞

図版第五　第3トレンチ全景＜西側より＞

第3トレンチ第5区I－Jセクション土層断面＜南西より＞

図版第六　第4トレンチ全景＜西側より＞

第4トレンチ第3区K－Lセクション土層断面＜南西より＞

図版第七　第一号住居址プラン確認状況＜南側より＞

第一号住居址遺物出土状態＜南側より＞

図版第八　第一号住居址遺物出土状態＜西側より＞

第一号住居址全景＜南側より＞

図版第九　第一号住居址全景＜西側より＞

第一号住居址カマド断面＜南側より＞

図版第一〇　第二号住居址プラン確認状況＜南側より＞

第二号住居址発掘調査風景＜南側より＞

図版第一一　第二号住居址遺物出土状態＜西側より＞

第二号住居址カマド西側遺物出土状態＜西側より＞

図版第一二　第二号住居址遺物出土状態＜南側より＞

第二号住居址カマド断面＜南側より＞

図版第一三　第二号住居址遺物出土状態

第二号住居址全景＜南側より＞

図版第一四　掘立柱建物跡検出状況＜南側より＞

掘立柱建物跡柱穴発掘後の状況＜南側より＞

図版第一五　掘立柱建物跡P_4（右），P_5（左）半截発掘断面＜南側より＞

掘立柱建物跡P_{10}半截発掘断面＜南側より＞

図版第一六　第一号住居址出土土器・鉄製品
図版第一七　第二号住居址出土土器（一）
図版第一八　第二号住居址出土土器（二）
図版第一九　第二号住居址出土石器

第一章　発掘調査に至る経過

平成3年11月4日付の『茨城新聞』は，那珂郡大宮町の水戸北部中核工業団地が分譲を完了し，このほど分譲完了記念式典が行われたことを報じている．

同団地は，県，地域整備公団，大宮町の三者が一体となって事業推進してきたもので，総面積158ヘクタール．昭和51年に第一期造成工事に着手して，緑豊かな"インダストリアルパーク"として県北地域開発，若者定着のための就労の場確保を狙いに造成を進め，分譲が行われてきた．

現在54社が立地契約，うち35社が操業を開始している．都心から2時間以内の緑豊かな工場団地として，一部上場の大企業が進出，生産活動を続けている．ということである．

進出企業の一である日立造船株式会社（本社・大阪市此花区西九条5－3－28）は従業員の定着化をはかり，大宮町字姥賀2993－3ほかの地に，延床面積1894.55㎡の鉄筋コンクリート造3階建の日立造船（株）大宮町姥賀単身寮を建設することになった．

しかし，開発予定地域7182㎡は周知の姥賀遺跡に隣接するため，これの取扱いについて大宮町教育委員会，開発関係者，水戸教育事務所の三者で協議を行った結果，とりあえず敷地面積6258㎡のうち平坦部の試掘調査を実施し，遺構の有無を調査した後にあらためて検討するということで合意に達した．

試掘調査は，千種重樹（県埋蔵文化財指導員）を担当者とし，調査補佐員に水谷正を加え，地元作業員の協力を受け，調査期間を平成3年2月21日より6日間と決定した．

トレンチ法による試掘調査の結果，後述するような比較的保存のよい歴史時代の住居址2軒と掘立柱建物跡1軒を検出したので，遺跡のエリア内であることが明白となり，文化財保護法の規定に従い，所定の手続きを行い，遺構の確認発掘調査を実施することになった．

発掘調査は，試掘調査と同様に，千種重樹を担当者とし，調査補佐員に飯島栄子を加え，地元作業員の協力を受けて平成3年4月5日より4月17日までの10日間実施した．

第二章　遺跡の位置と考古学的環境

大宮町は県の中央部北寄りに位置する．町の東を久慈川が南流し，西を那珂川が南東に流れ，中央を『常陸国風土記』久慈郡の条に「丹石交雑れり，色は瑳碧に似て，火を鑽るに尤好し」と記されているメノウを産する玉川が南流する．

東は久慈郡金砂郷村，西は緒川村・東茨城郡御前山村・同桂村，南は瓜連町・那珂町，北は山方町・美和村に接する．

那珂川と久慈川とに挟まれた丘陵地を形成し，町域の大部分は，これらの河川の河岸段丘上にあり，西方一帯は標高200 m前後の山地で鷲子山塊に連なる丘陵地帯になっている．

南部は標高15～30 mの沖積地で穀倉地帯となっており，北高南低の地形を呈する．

中央をJR水郡線と国道118号が並行して南北に貫き，水戸市と県北山間地域の中間に位置する一方，日立市と栃木県足利市を結ぶ国道293号が町の中心部で交差して東西に走り，地理的に那珂郡の中心であるばかりでなく，県北地域の政治・経済・文化の一拠点となっている．

本遺跡は，久慈川に東面して南東にのびる町の北部の台地上に所在し，標高50 m前後，東側の台地下を国道118号が，西側を国道293号が走る．

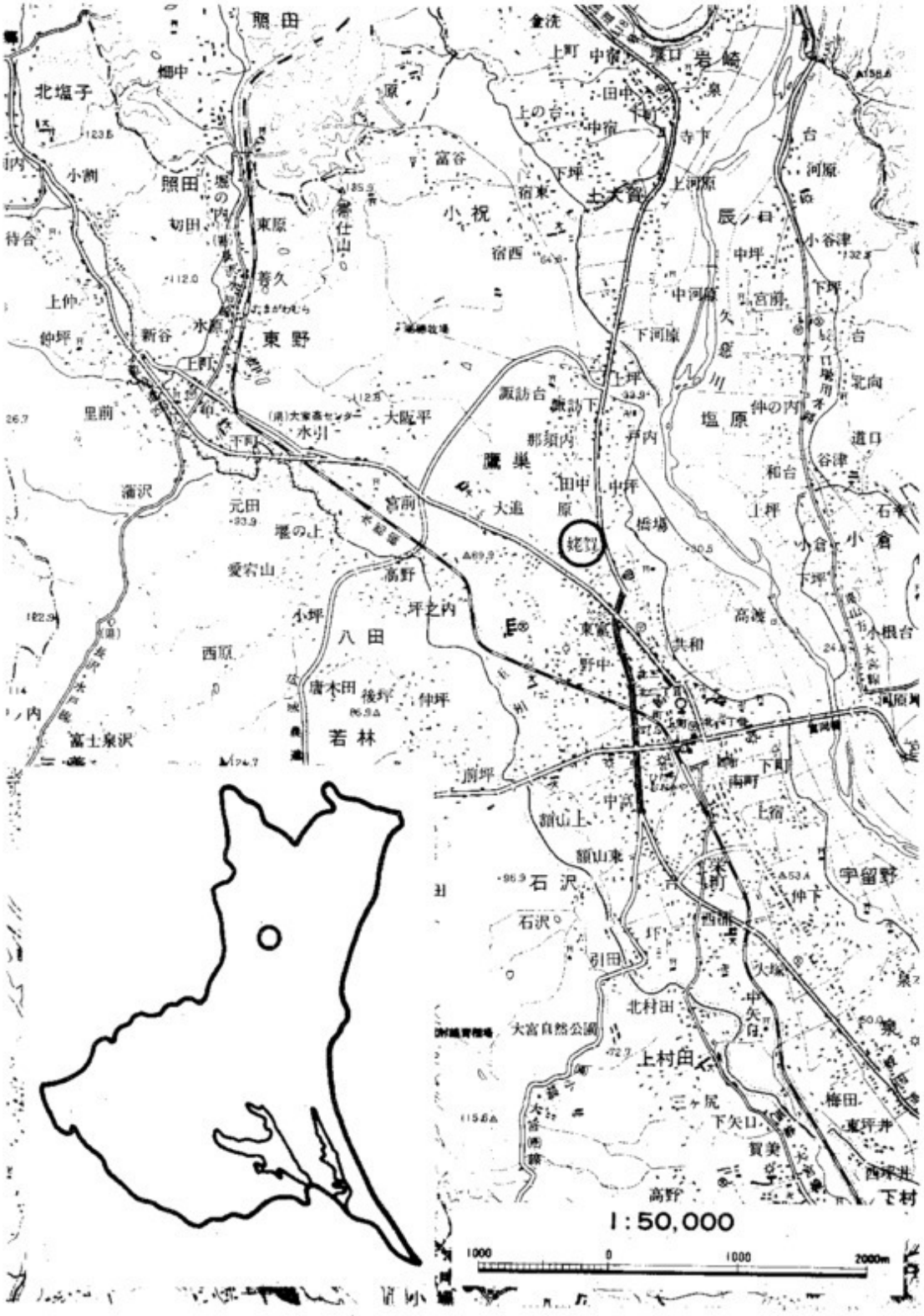
谷を挟んで北西400 mの位置には鷹巣遺跡があり，本遺跡に接する東側には大宮地方広域組合消防本部と大宮保健所がある．

昭和62年の『茨城県遺跡地名表』に記載されている大宮町内の遺跡は112を数えるが，本遺跡と同時期の奈良・平安時代の遺跡としては，東平，高ノ倉，三美，鷹巣，宮中，小野天神前，北村田，菅原，戸内，抽ヶ台，西坪井，富谷原，富谷原下，石幸，台坪，春日神社前，中丸，宿東，小場中崎，西原，源氏平，居合などがあげられる．

特に本遺跡の北側には，谷津を挟んで指呼の間に鷹巣遺跡があり，過去2回（昭和56年・61年）発掘調査が行われている．

就中，第二次調査で多量に出土した布目瓦は，久慈郡金砂郷村大里・薬谷に所在したと想定されている久慈郡衙跡への供給説があり，出土遺物の特徴から8世紀第3四半期ごろから営まれた集落跡で，遺跡の性格上，郡衙や寺院と消長をともにしたものではないかと考えられている．

奈良時代の大宮地方は，機織あるいは瓦製作などに関係した専業集団が居住し，古代常陸における工芸技術の重要な役割を担っていたことが窺われ，古代史および考古学的事象には事欠かない地域であるということができよう．



第一図　遺跡位置図・周辺地形図

第三章　確認調査（試掘）の概要

単身寮建設予定地内の表土観察の結果では，土質が全く均一で特別な変化は認められなかった．

表採遺物も少なく，土師器の小破片を若干採集したにすぎない．

この事実は遺構検出の重要な一つの指標となるものである．したがって，大宮町教育委員会と私の現地踏査時から，ここに遺構が埋没している可能性は極めて弱いという見解が支配的であった．しかし，現実には全く相反する結果が出てくる場合もあるので，谷津に落込む急傾斜面以外の平坦地について，その内容を調査し，遺構の有無を確認するために，東西方向に10ｍ間隔で並行する4本のトレンチを設定した．

各トレンチは幅2ｍとし，10ｍを1区画とした．

第1トレンチの確認調査

調査区の南端にあたる50ｍ（5区画）のトレンチである．

第4区画A－Bセクション（10ｍ）の断面図から窺われるように，耕作土（表土）は平均30㎝前後の深さがあり，ローム粒子を含んだ黒色土である．黒色土の下には，黒色土をベースにロームブロック（15×16㎝，3×7㎝）・ローム粒子を全面に少量混入した黒褐色土が15～25㎝の厚さで堆積し，ローム層に移行する．

第4区から第5区にかけて，カマドと住居址の一部が検出されたが，大部分がトレンチ南壁外に埋没しているため，これの全容を把握するため部分拡張して，面積約20㎡の隅丸長方形を呈した住居址の平面プランを確認した．

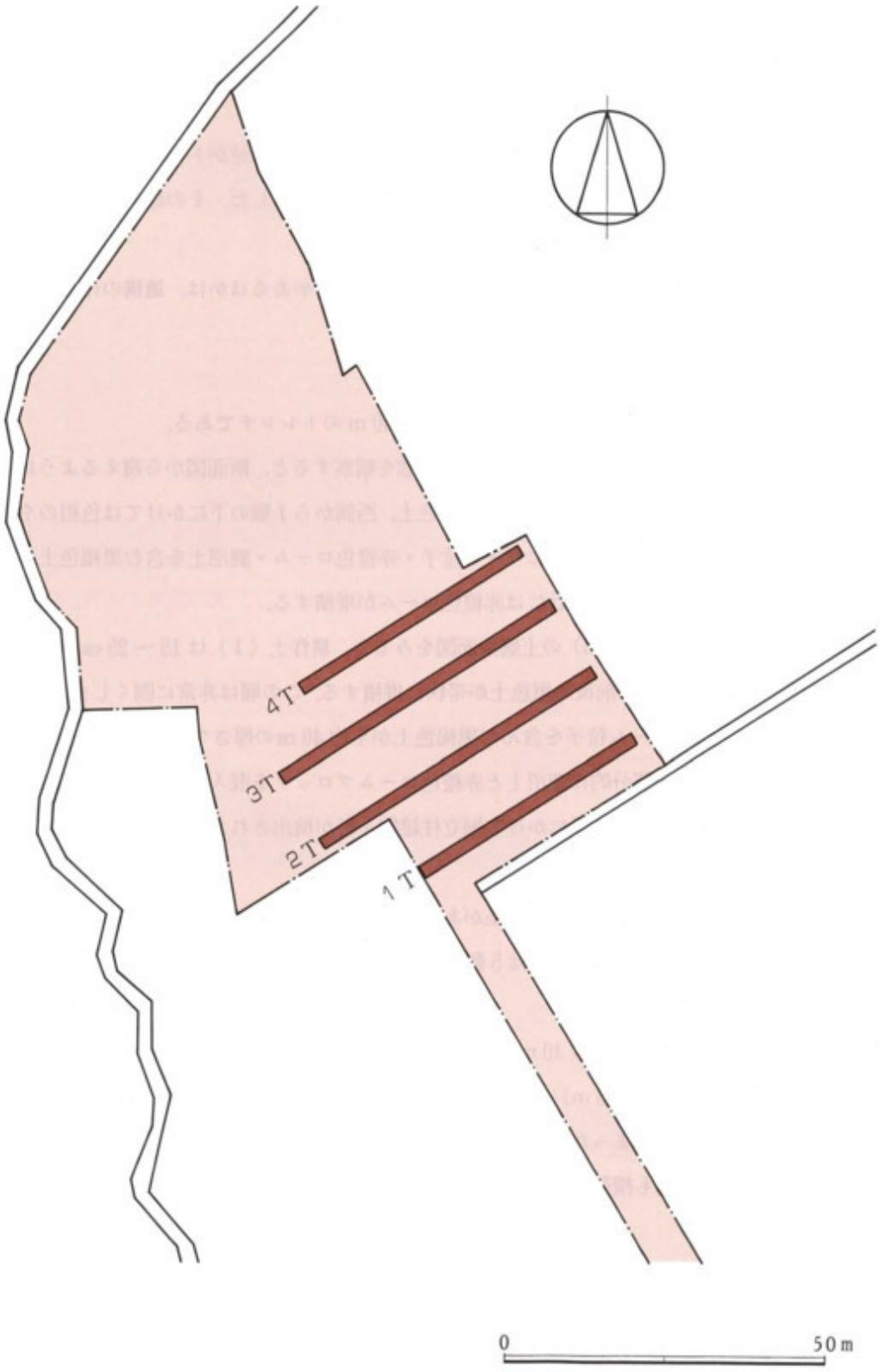
遺構としてはこの住居址1軒だけで，これ以外には第4区から2個，第5区から1個の攪乱穴が認められただけである．これらの攪乱穴の深さは5～50㎝である．

第2トレンチの確認調査

第1トレンチの北側に並行する長さ50ｍのトレンチである．本トレンチの西側は谷津に向ってかなりの傾斜（15°）をみせている．

第1区C－Dセクション（10ｍ），第4区E－Fセクション（10ｍ）の堆積土の深さや性状は次のとおりである．

第1区の耕作土（表土）は，ローム粒子を含む黒色土が平均15㎝の深さで堆積し，その下は複雑な層序を示している．断面図でみるように傾斜面の左側（西）から，赤橙色を呈した鹿沼土を含む比較的やわらかいローム（Ⅳ）が下層に堆積し，その上に赤橙色ロームと鹿沼土を混入した赤褐色土（Ⅲ）が存在し，耕作土と接するⅡ層にはさらさらとして崩落しやすい黒褐色土が堆積する．この堆積土の性状は，かなりの攪乱をうけた様相が窺える．



第二図　調査区トレンチ設定図

第4区E－Fセクション（10m）の堆積土の性状を観察すると，深さ20～25cmの耕作土の下にほぼ同じ厚さの黒褐色土（Ⅱ）が存在する．このⅡ層にはローム粒子・ロームブロックを多量に含み，炭化物も混在する明褐色土が堆積しローム層に移行する．

本トレンチの第4区からも住居址の部分検出が認められた．大部分がトレンチ北壁外に埋没しているため，トレンチを北側へ部分拡張して全体のプランを確認した．その結果面積約9㎡ほどの隅丸方形を呈した住居址を検出することができた．

第2区および第4区に各1個の攪乱穴（深さ30～45cm）があるほかは，遺構の存在は認められなかった．

第3トレンチの確認調査

本トレンチは第2トレンチの北側に並行する長さ50mのトレンチである．

第2区G－Hセクション（10m）の堆積土の状態を観察すると，断面図から窺えるように，耕作土（Ⅰ）は，東側が平均20cm前後の深さの黒色土，西側から1層の下にかけては色相のやや明るい黒色土（Ⅱ）が堆積し，その下にローム粒子・赤橙色ローム・鹿沼土を含む黒褐色土が存在しローム層に移行する．確認面付近には赤橙色ロームが堆積する．

第5区I－Jセクション（10m）の土層断面図をみると，耕作土（Ⅰ）は15～25cmの深さで堆積し，耕作土の下に厚さ5cm前後の黒色土が帯状に堆積する．この層は非常に固くしまっている．

Ⅱ層の下には全面にローム粒子を含んだ黒褐色土が平均40cmの厚さで存在しローム層に移行する層序を示している．部分的に鹿沼土と赤橙色ロームブロックを混入した赤褐色土がある．

本トレンチの第3区から第4区にかけて掘立柱建物1軒が検出されたが，これの詳細については後述する．

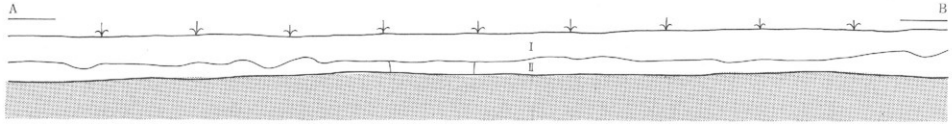
第1区と第2区の境界から溝状遺構1条があらわれた．幅は南壁側3.2m，北壁側2.2m，確認面からの深さは1.2mを測る．攪乱穴は5個存在し，深さは30～70cmである．

第4トレンチの確認調査

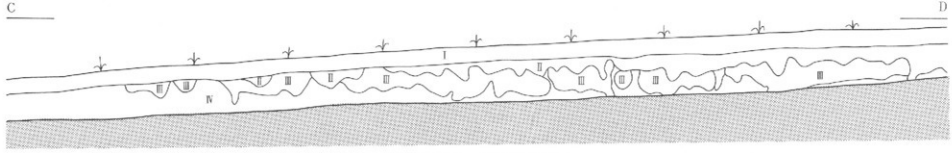
もっとも北側に設定された長さ40mのトレンチで第3トレンチと並行する．

第3区K－Lセクション（10m）の堆積土の深さや性状を観察すると，耕作土は平均30cm前後の深さで，その下に固くしまった黒褐色土が30～40cmの厚さで堆積し，ローム層に移行する．

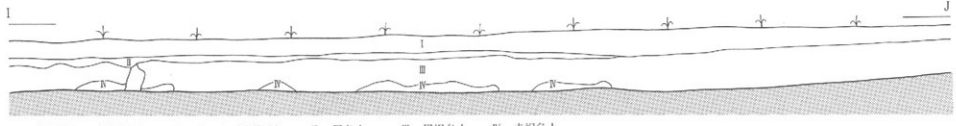
本トレンチからは遺構も攪乱穴も認められなかった．



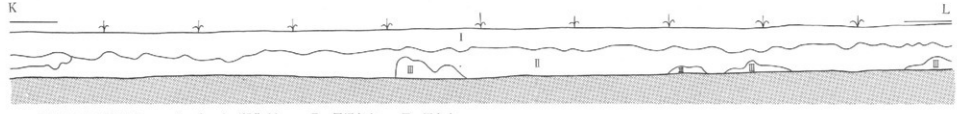
第1トレンチ第4区　　Ⅰ　表　土（耕作土）　　Ⅱ　黒褐色土



第2トレンチ第1区　　Ⅰ　表　土（耕作土）　　Ⅱ　黒褐色土　　Ⅲ　赤褐色土　　Ⅳ　赤橙色ローム

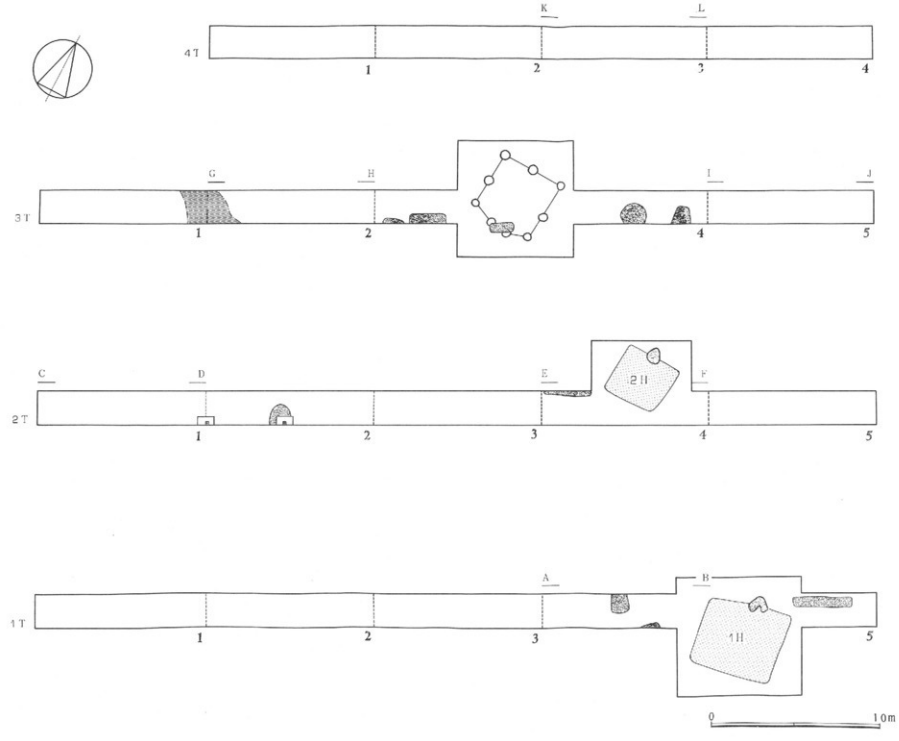


第3トレンチ第5区　　Ⅰ　表　土（耕作土）　　Ⅱ　黒色土　　Ⅲ　黒褐色土　　Ⅳ　赤褐色土



第4トレンチ第3区　　Ⅰ　表　土（耕作土）　　Ⅱ　黒褐色土　　Ⅲ　褐色土

第三図　トレンチ土層断面図



第四図　トレンチ配置図・遺構分布図

第四章　発掘調査の概要

1　住居址の調査

第一号住居址

第1トレンチ第4～5区からカマドとW－Xコーナーが明確にあらわれ，一見して住居址であることがわかったが，部分検出だったのでトレンチを拡張し全容を把握した．

遺存状態　　耕作による攪乱は受けていないが，西壁中央部とWコーナーに攪乱穴が存在する．

しかし，壁面の部分破壊程度で大きな損傷にはいたらず，保存は良い方であろう．

規　模　　東壁（X－Z）3.4 m，西壁（W－Y）4.1 m，南壁（Y－Z）4.8 m，北壁のW－X間は5.2 mの辺長を測り，北壁がやや長い隅丸長方形を呈し，面積は約19 ㎡である．

周壁は若干傾斜して掘り込まれているが，どちらかといえば垂直に近い立ち上がりといえよう．

壁高はWコーナー32 cm，Xコーナー27 cm，Yコーナー34 cm，Zコーナー33 cmで，壁面の崩落は認められず堅固である．カマド部を除く周壁に沿って幅10～20 cm，深さ5～12 cmの溝がめぐっている．

床　面　　細かい凹凸は認められるがおおむね平坦である．東壁と西壁側は軟らかく，踏み固めた痕跡が全く認められない部分と，わずかに踏み固めたと思われる程度の床面で，その硬度は1～2に相当する．

カマド前面より南壁下にかけての中心部床面は固く踏みかためられているが，亀裂は生じていないので，硬度は3に比定できる．

ピット　　確認できたピットは6個である．このうち主柱穴と考えられるのはP_1，P_2，P_4，P_5である．P_1は径32 cm，深さ30 cm，P_2は径32 cm，深さ43 cm，P_4は径27 cm，深さ47 cm，P_5は径33 cm，深さ38 cmを測る．この4個の規模と，各コーナーのほぼ対角線上にあるという位置関係からみて本址の主柱穴と見做してよいだろう．

カマド　　北壁中央よりやや北寄りの位置に所在し，壁外へ60 cmほど掘り込んで構築されている．規模は焚口－奥壁間130 cm，袖部東西最大幅160 cm，焚口幅約70 cm，燃焼部は浅く掘りくぼめ，楕円形に近い形状をとる．煙道部はゆるやかな傾斜で外方へ立ちあがる．

両袖は砂粒混りの黄褐色粘土を用材として構築されている．特別な補強材は認められないが，焚口の前面，つまり住居址側へ多量の粘土塊が流出している．支脚は存在しない．

燃焼部，煙道部の壁面はかなり赤変しており，使用頻度が高く，熱効率のよいカマドであったことが窺える．

埋 没 土　　竪穴内の埋没土は2層に区分することができる．この識別は極めて明瞭である．

床面上より黒褐色土b，黒褐色土aの順で堆積する．

この層序は，周囲の土砂の自然流入ではなく，人為的な埋め戻しであることはいうまでもない．

遺物の出土状態　　出土遺物の総数は62個である．内訳は土師器27個，須恵器2個，鉄製品1個，自然石32個で，土器の完形品はなくすべて破片である．接合資料も抽出できなかった．

ドット・マップでみた平面分布のあり方は，非常にまばらで空白の部分が多い．土器よりも自然石の数が多いということは特徴的であろう．

このドットをセクション図に投影すると，床直には概して少なく，ほとんど中層に散在する傾向を指摘できる．しかし，面積約19㎡の規模にしては遺物の数が少なすぎる．これは本址廃絶の際に徹底した土器の搬出，つまり完全引越しが行われたのではないかと思われる．

カマド内の遺物が皆無であることも，カマド放棄後にカマド内に何も残さず，しかも支脚まで抜いて破壊を行うという類例に徴すれば，これに似た行為が行われたのかも知れない．

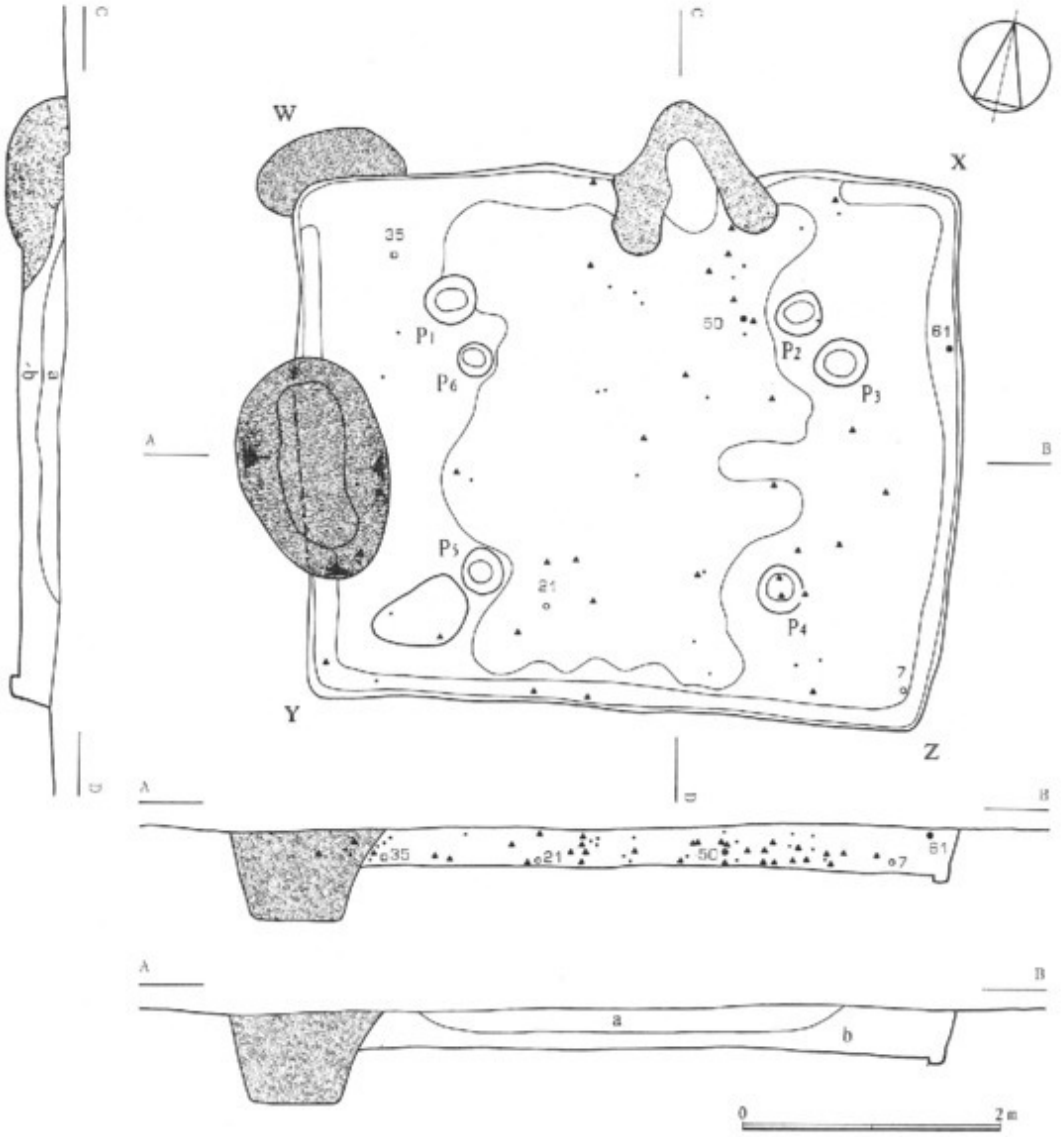
本址の主体となる遺物は土師器である．

遺物概要　　出土遺物の中から器形の窺える土器は，土師器では甕形土器，皿形土器，須恵器では坏形土器，高台付坏形土器である．

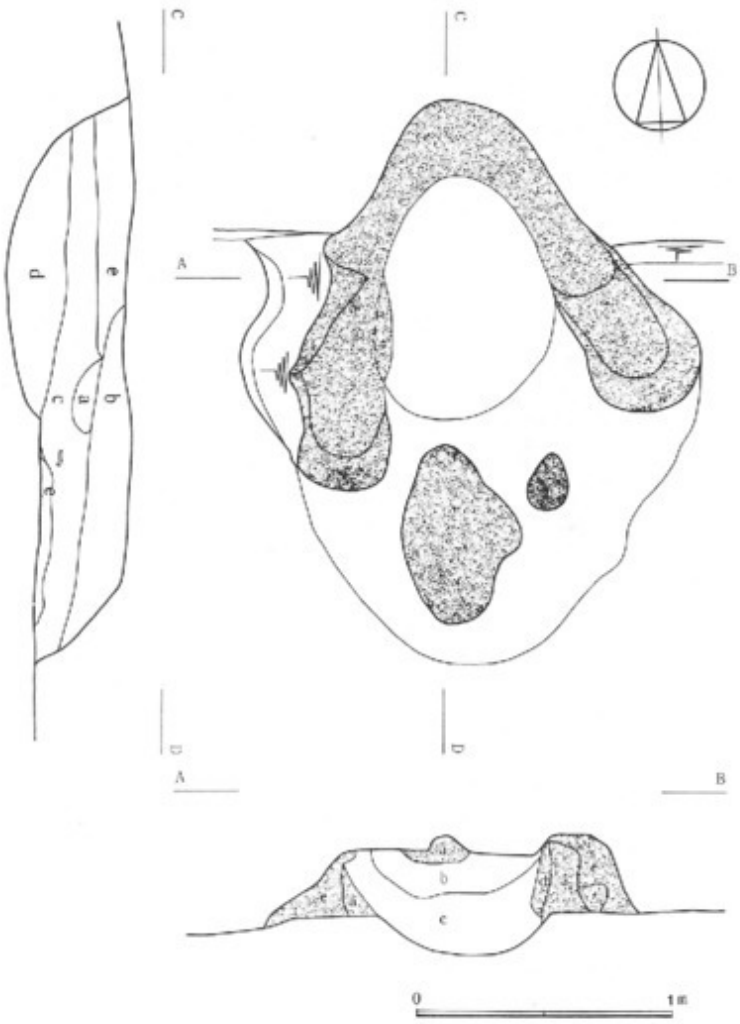
土 師 器　　61は内面を内黒処理した皿形土器，50は甕形土器の底部周辺で篦削り整形が行われている．

須 恵 器　　7は高台付坏形土器，21は坏形土器である．

時　　期　　出土遺物が少なく全体を律することは困難であるが，国分期であろうと思われる．



第五図　第一号住居址実測図・遺物出土状態図



第六図　第一号住居址カマド実測図

層序説明

a　黄褐色粘土　袖部および天井部の構築材.

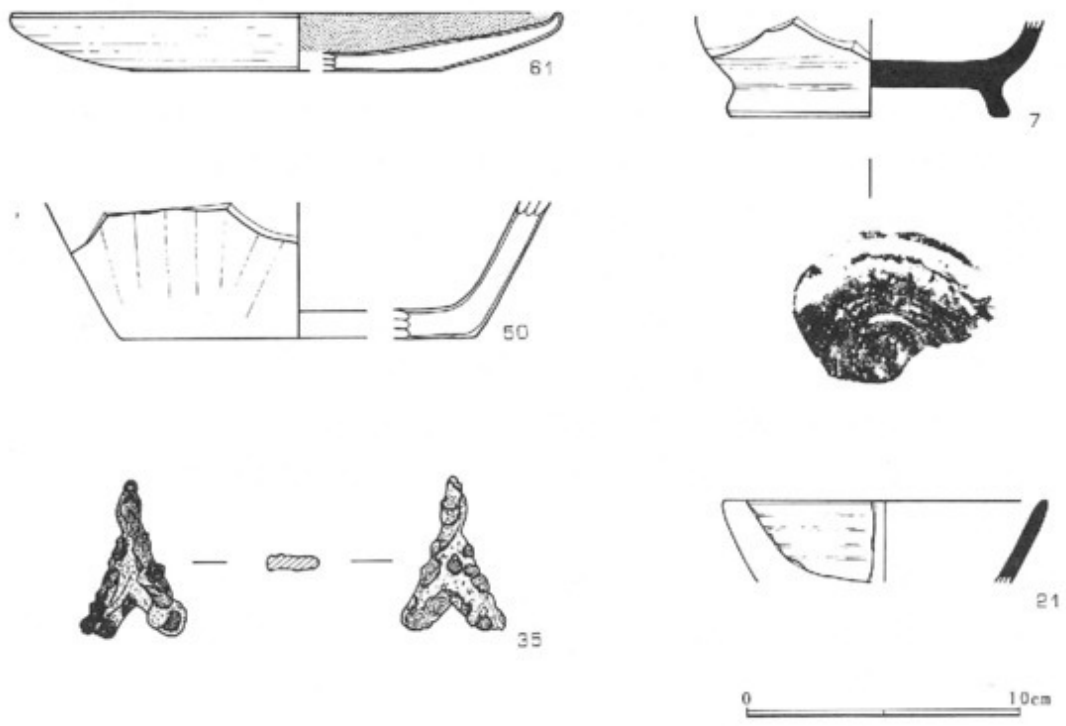
b　黒　色　土　ローム粒子・焼土粒子をごく微量混入する.

c　赤褐色土　レンガ状の焼土ブロックを多量に混入する. 層全体に赤味を帯びている.

d　焼　　土　袖部の粘土が赤変したもので, レンガ状にかたく焼けている.

e　褐色粘土　粘土と黒色土の混合土で粘土が大部分を占める. 袖部の被覆材である.

f　ロームブロック



第七図　第一号住居址出土土器・鉄製器実測図

第二号住居址

本址は第2トレンチ第4区から住居址のコーナーと思われる部分が明瞭にあらわれたので，トレンチ北壁を部分拡張して全体のプランを確認した．

遺存状態　　攪乱も破壊もなく保存状態は良好である．

規　模　　東壁（X－Z），3.1 m，西壁（W－Y）3.0 m，南壁（Y－Z）3.0 m，北壁のW－X間は3.1 mを計測し，平面形状は隅丸方形を呈し，面積約9.3 ㎡ほどの竪穴住居址である．

中軸方向はほぼ磁北を指す．

周壁はやや傾斜して掘り込まれており，壁高はWコーナー32 cm，Xコーナー51 cm，Yコーナー45 cm，Zコーナー47 cm，東壁中央部56 cm，西壁中央部41 cm，南壁中央部46 cmを測り，東壁がもっとも高い．壁面の剥落・崩落は全く認められない．

床　面　　西側が高く東側がやや低い傾向がみられるが，床面に凹凸は認められずおおむね平坦である．特に固く踏みかためられたような痕跡は窺えないが，床面硬度は3に近い2に相当するだろう．周溝は存在しない．

ピット　　床面および壁外確認面を精査したが，ついに検出されなかった．

カマド　　北壁の中央に位置し，燃焼部を壁内に煙道部を壁外に掘り込んだ構築である．

天井部は崩落しているけれども，良好な保存状態といえるだろう．

袖部は粘土を使わずに，ロームを主体に黒色土を少量混入して堅固に積み上げている．特に左袖部は良好な状態で残存していた．狭小な竪穴を合理的に利用した構築の一例といえるだろう．

焚口から燃焼部に向って底面を若干掘りくぼめ，燃焼部から煙道部に移行する断面はやや内湾しながら約35°の傾斜で立ち上っている．内部には燃焼された焼土塊層が存在する．

奥壁～焚口間約100㎝，焚口幅約50㎝，燃焼部幅約70㎝であった．

埋没土　　埋没土層はほとんど単一層に近く，A－Bセクション図を観察すると，a層b層ともに黒色土とローム粒子の混合土であるが，a層は黒色の色調がb層よりやや強く，b層はa層に比してローム粒子の混入が若干多いという程度である．

したがって，明確な区分線は引き難く，破線を用いて境界とした．

この埋没土層は，セクションから容易に窺われるように，明らかに人為的層序であることは言を俟たない．

遺物の出土状態　　竪穴内から出土した遺物の数は132個，カマド内およびその周辺からの出土遺物11個の総数143個である．半完形品1個以外はすべて破片である．内訳は土師器80個，須恵器6個，石器2個，自然石55個となる．

土器80個の表裏関係は，表40個（50%），裏31（39%），立ち9個（11%）という比率である．

ドット・マップでみた平面分布の状態は，カマドの前面西側からWコーナーにかけて集中的なまとまりをみせている．しかし，この部分は自然石が多く，土器破片は竪穴内の空間に非常にまばらに散在する．周壁下周縁は特に空白が目立つ．

A－Bセクションに投影したドットのあり方は，床面から確認面近くの埋没土中に包含される．

平面ドットでみるとおり，東西両壁付近は空白が多い．

本址の主体となる遺物は土師器で，土器の中では93%を占める．

接合資料は土師器に2例認められる．

接合資料　1＜甕形土器＞K 11 △ 18 ・K 6 △ 39 ・K 9 ▽ 9 ・K 7 △ 18 ・K 2 ▽ 27 ・K 4 △ 41 ・H 90 △ 35

接合資料　2＜甕形土器＞H 70 △ 43 ・K 1 ▷ 39 ・H 94 △ 27 ・H 117 ▽ 48 ・H 71 △ 23 ・H 5 △ 10 ・H 61 ▽ 7 ・H 6 △ 22 ・H 93 ▷ 31 ・H 82 △ 7 ・K 3 △ 18 ・H 103 ▽ 30 ・H 73 △ 17 ・H 75 △ 11

遺物概要　　出土土器を器種別に概観すると，土師器には甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器，蓋形土器，須恵器には甕形土器，長頸壺形土器，高台付坏形土器などが認められる．

土師器　　74の高台付坏形土器はロクロによる成形で，内面に黒色処理を施している．

95の坏形土器は口縁部と底部の境に明瞭な稜があり，内面は黒色処理をしている．

接合資料の甕形土器は，長胴形を呈し，最大径は上半部にある．器面の上半は刷毛目，下半に

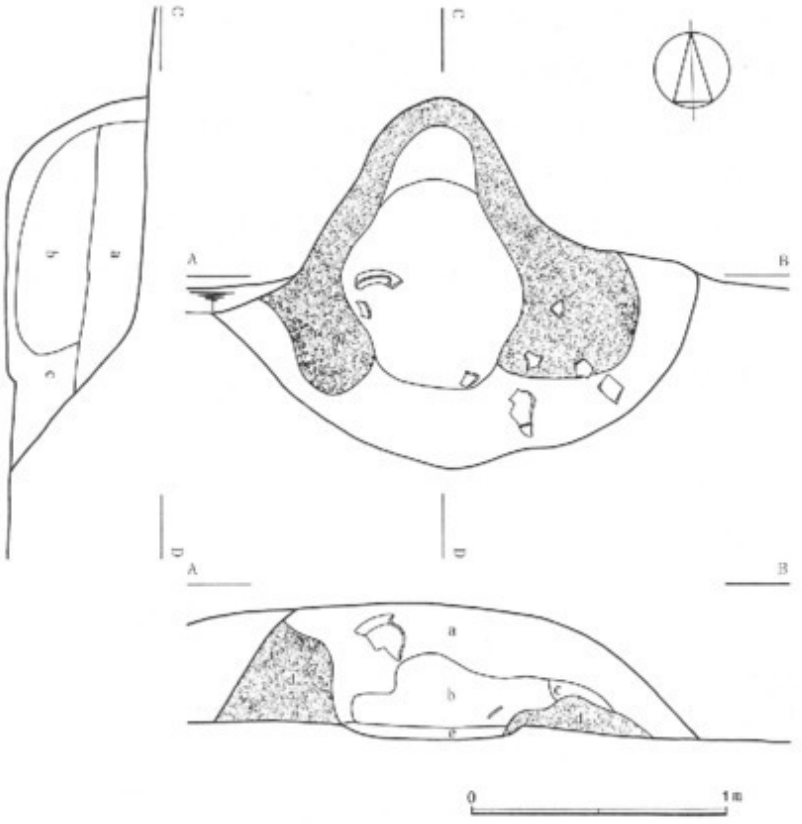
斜め・縦方向の箆削りを施して整形している．

須恵器　28は高台付坏形土器で底部から口縁が外反する．7はおそらく長頸壺形土器の底部であろう．129は甕形土器の胴部破片で平行叩き目痕がみられる．

石　器　100は凹石の破損品である．現存最大長10㎝，最大幅5.5㎝，厚さ3.1㎝を測る．a面に直径1.5～2.0㎝のくぼみが破損部を含めて8個，c面にも同様のくぼみが5個認められる．石質は砂岩である．17は敲石で，比較的偏平な自然石を利用し，a面に直径4.0×6.5㎝，深さ0.8㎝のくぼみが1個存在する．c面の中央部には使用痕と思われる小さなくぼみが数個認められる．

時　期　9世紀後半から10世紀前半に廃絶した竪穴であろう．

第八図　第二号住居址実測図・遺物出土状態図



第九図　第二号住居址カマド実測図

層序説明

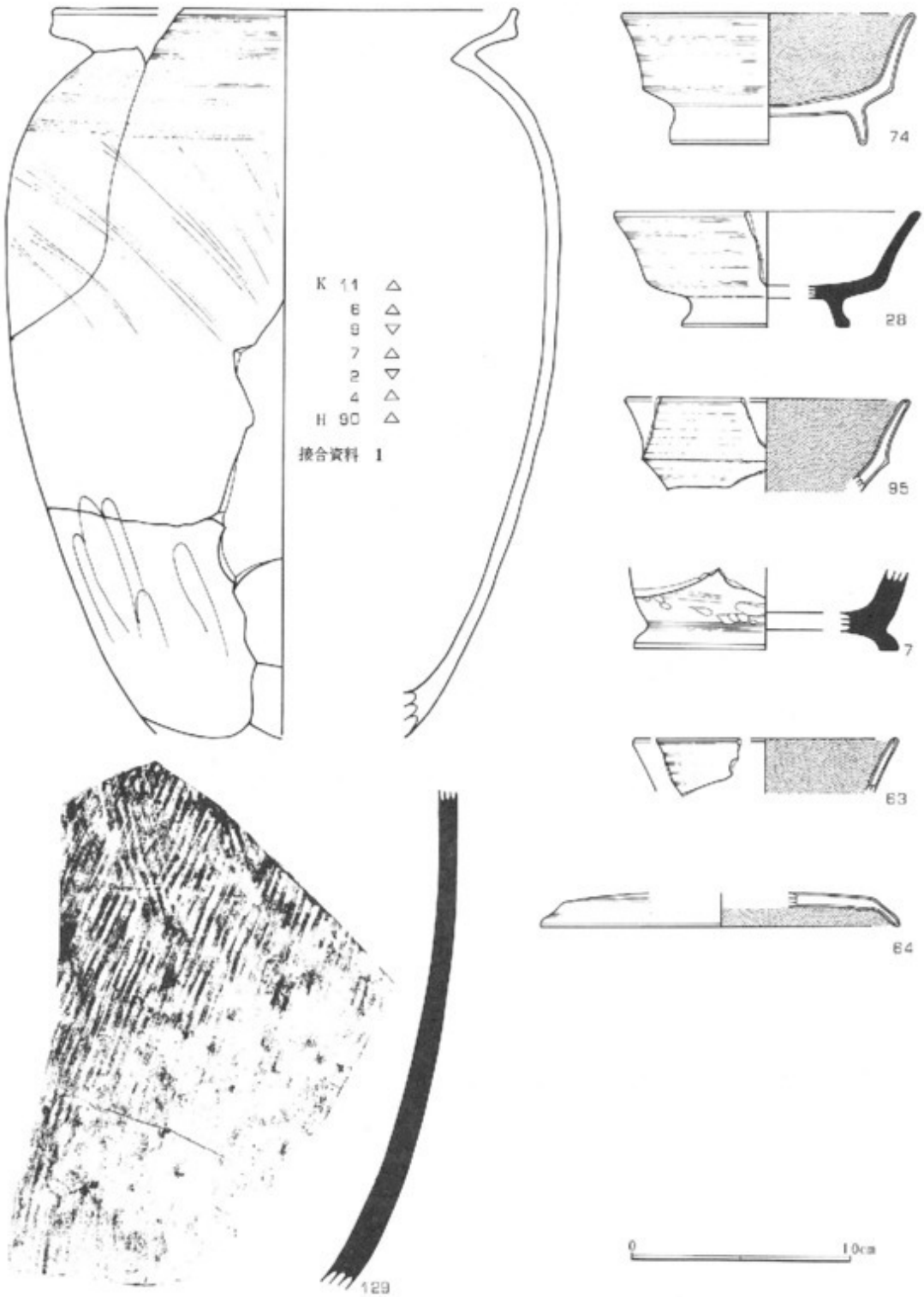
a　黒褐色土　黒色土がベースで，ローム粒子および焼土粒子を混入する．

b　赤橙色土　焼土ブロックを多量に混入する．

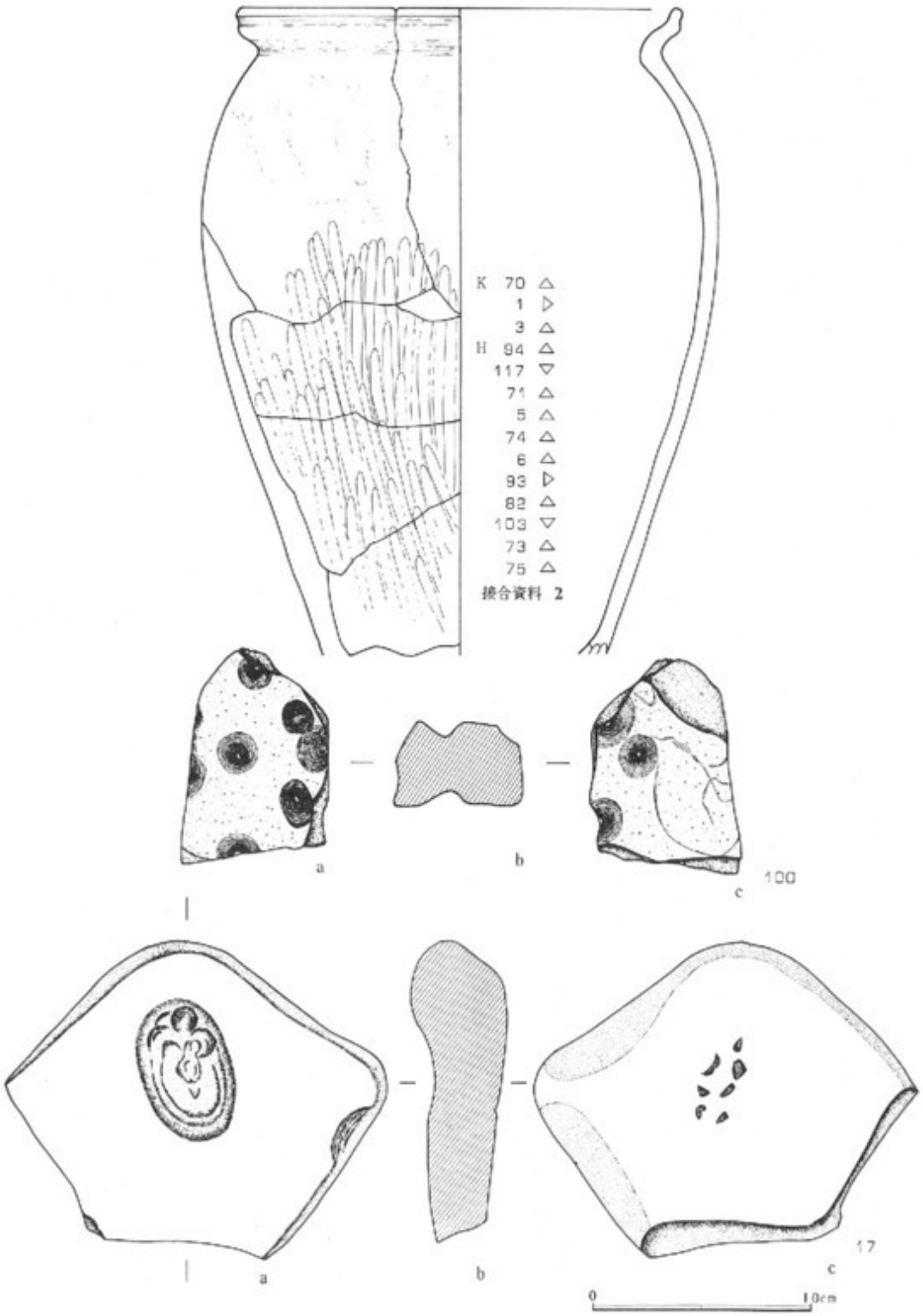
c　赤褐色土　黒色土と焼土粒子の混合土．

d　ロ　ー　ム　袖部の構築材で，ロームを主体に黒色土を少量混入してかためている．

e　明褐色土　ロームに少量の焼土を含む．



第一〇図　第二号住居址出土土器実測図・拓影図



第一一図　第二号住居址出土土器・石器実測図

2　掘立柱建物跡の調査

規　模　　本址は第3トレンチの第3～4区から検出された．平面プランを実測図によって観察すると，東側（P_3-P_6）3.3 m，西側（P_1-P_9）3.2 m，南側（P_6-P_9）3.4 m，北側（P_1-P_3）3.4 m を測り，最長，最短に 20 cmの誤差はあるもののおおむね方形を呈し，面積約 11.2 ㎡で主軸方向はほぼ磁北を指している．

南側の P_6 と P_9 を結ぶ線上の中央部に，やや南側に突出して P_7 と P_8 が存在するが，これはおそらく出入口用の柱穴ではないかと思われる．P_7-P_8 間は 80 cmである．P_5 は P_4 の補助柱穴であろう．

ピットの配列を詳細に観察すると，北側の P_1-P_2 間 145 cm，P_2-P_3 間 157 cm，東側の P_3-P_4 間 147 cm，P_4-P_6 間 145 cm，西側の P_1-P_{10} 間 135 cm，南側の P_6-P_7 間 103 cm，P_8-P_9 間 90 cmを計測し，各柱穴間にばらつきがみられる．

柱穴の実相　　保存状態の良好なピットのうち P_4，P_5，P_{10} については半截方式による発掘調査を行った．その結果次のような構築・廃絶工程が判明した．

柱穴の構築（柱の埋設も含む）工程

1　あらかじめ柱穴を埋設する位置にやや大形のピットを掘る．

2　柱の埋設深度を統一するためにロームを埋め戻して突き固める．断面図で該当する土層は P_4 の d で，床面硬度の3に相当する．これは設計ミスによる掘り過ぎではなく，埋設深度の統一と柱の沈下予防の処置であったと考えられる．

3　柱を埋設した周囲に掘削したロームを多少突き固めながら床面付近まで埋め戻す．

4　土砂の埋没が完了すると，その周囲を踏み固めて床面として使用する．

柱穴の廃絶（柱の撤去も含む）工程

1　建物廃絶後の柱の処理は，まず最初の段階として，柱の周囲の土砂を掘りとる．この工程で各柱穴の床面は斜めまたは垂直に切断される．

2　柱を撤去する．この作業の前後に上部の土砂が内部へ崩落したことも考えられる．これに該当するのは P_4 と P_{10} の a 層である．

3　柱を撤去した窪みに土砂を埋める．この窪みがいわゆる確認時の口径プランとなるので，発掘時の口径と必ず一致するとは限らない場合がある．

P_4　43 × 41 cm（長径×短径），× 46 cm（深さ），円形．

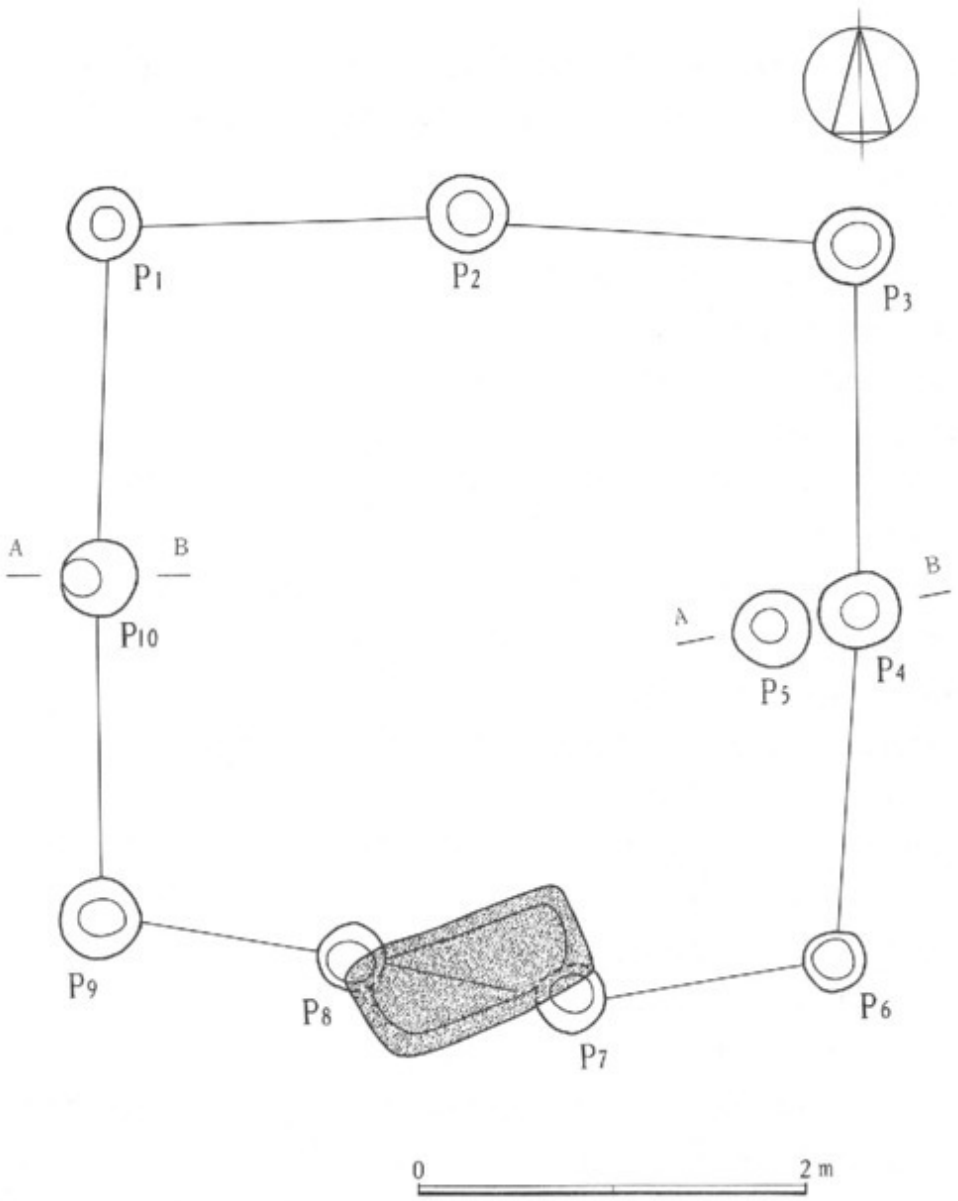
深さ 46 cmでロート状に掘り込まれている．底部は粘土質ロームを埋め戻して突き固め，この面に柱を埋設していることがわかる．したがってピットの深さは 46 cmであるが，柱の埋設時における柱穴の深さは 40 cmということになり，P_{10} の深さと全く共通する．この数値は半截発掘法によらなければ得られないデーターであろう．

P_{10}　39 × 37 × 40 cm，ほぼ円形．

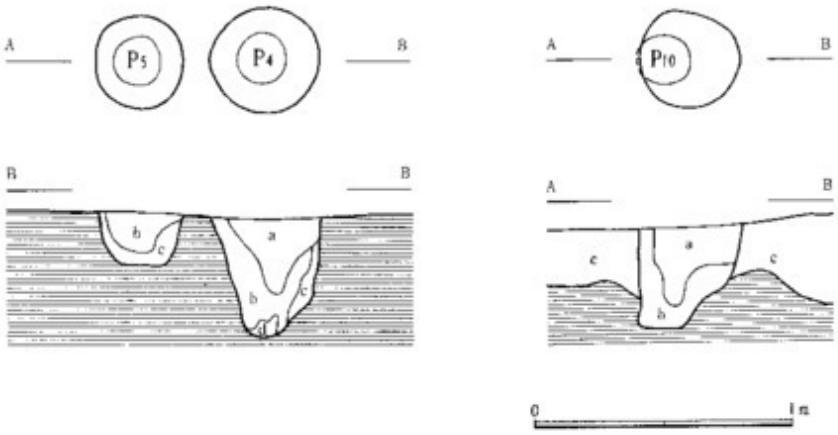
本柱穴の深さは 40 cmで，断面図から窺えるように，その形状はほとんど P_4 に近似し，底面は粘性ローム層に達している．

埋設土の性状は，aが黒色土，bはローム粒子を混入する暗褐色土，cは赤橙色ローム層である．柱の埋設は左寄りであるが，右側の膨らみは柱の撤去を斜めに行ったことを物語るもので，a層はその作業時に上部の土砂が崩落したものであろうと思われる．

本柱穴の場合は，底面を特に突きかためたような痕跡は認められない．



第一二図　掘立柱建物跡実測図



第一三図　掘立柱建物跡柱穴実測図

表1　柱穴一覧表（計測単位cm）

柱穴番号	長径	短径	深さ	底径	開口部形状
P_1	38	38	34	16	円形
P_2	42	40	39	23	ほぼ円形
P_3	40	40	32	24	円形
P_4	43	41	46	19	ほぼ円形
P_5	36	34	20	18	ほぼ円形
P_6	32	30	52	20	ほぼ円形
P_7	37	35	37	21	ほぼ円形
P_8	35	34	43	23	円形
P_9	42	40	45	23	ほぼ円形
P_{10}	39	37	40	19	ほぼ円形

第五章　ま　　と　　め

姥賀遺跡の発掘調査の概要は，以上に記述してきたとおりである．しかし，遺跡全体の規模からみれば，今回発掘した調査区の範囲はまことに狭小であって，この結果からただちに本遺跡の全容を律することは不可能である．

私達は発掘に先だって遺跡の性格を把握するために，遺物の表面分布状況をつぶさに調査した結果，若干の土器片を採集することができたが，大宮町教育委員会の見解は，遺跡の中心は調査区の南東側に位置するものという認識であった．そのため，とりあえず隣接地扱いとし，トレンチ法による試掘を行ったところ，歴史時代の住居址2軒，掘立柱建物跡1軒が検出され，あらためて本調査区も遺跡のエリア内であることを再確認した次第である．

第一号住居址の面積は約19㎡，第二号住居址は約9.3㎡でカマドを中心に考えた主軸方位は両者ともほぼ磁北を指している．

住居址出土の遺物のうち，主体となるのは土師器で，完形品は無いが甕形土器，高台付坏形土器，坏形土器などの器種が認められたが，開発予定地の約50%は谷津に面した傾斜地で，人間の住居環境としては必ずしも好条件を備えているとはいいがたい．

遺構の存在が確実に期待できる場所は，本調査区南東の大宮保健所付近一帯の平坦地であろう．

将来この地区が開発される場合には全面発掘調査が不可避の条件となるだろう．

掘立柱建物跡は，地形的な立地条件から考えると，おそらく本遺跡全体からみた場合はその北西隅付近に位置するものと思われる．

本調査区の北西には，谷津を挟んだ約400mの近接位置に鷹巣遺跡が所在し，昭和56年9月24日から12月25日まで実施された鷹巣遺跡第一次発掘調査（担当者　伊東重敏氏）でも2軒の掘立柱建物跡が発見されており，その内容は次のように報告されている．

「1号掘立柱建造物址

本址は，7号住居址の東方と8号住居址の西方に検出された．

推定約12.9㎡の床面積をもつ3間×2間の掘立柱建物址である．柱穴の平面状態は，円・楕円と一定しない．柱穴の深さはほぼ一定である．柱間は，東－西で1.2～1.4m，南－北で1.65mを測る．また，柱穴の一つからは，ソロバン玉形の土錘が発見されている．

掘り方は直径45～55㎝のもので，深さは25～50㎝まで及んでいる．

2号掘立柱建造物址

本址は，1号建物址の北方，4号住居址の北西方に検出された．推定約5.1㎡の床面積をもつ2間×1間の建物址である．柱穴の平面形態は，円・楕円と一定でないが，直径25～50㎝程のも

ので，深さは遺構確認面から25～45㎝まで及んでいる．柱間は東－西1.25～1.4m，南－北で2mを測る．」

姥賀遺跡の掘立柱建物跡の床面積は約11.2㎡で，その規模は前記の第1号建物址12.9㎡と近似している．ただし，両遺跡とも出土遺物が皆無で，構築年代は不明であり，高床式なのか，有床平地式なのかも判然としない．おそらく住居址群と同時期か若干新しくなる遺構であろう．

今後，付近における同種柱穴の調査例が増加すれば，久慈川流域の掘立柱建物跡を究明する上で，興味のある問題を内包した遺跡であるといえよう．

参考文献

外山　泰久他『常陸鷹巣遺跡』第1次調査報告書　昭和58年（1983）

井上　義安『常陸鷹巣遺跡』第2次発掘調査報告書　昭和62年（1987）

千種　重樹『鷹巣遺跡隣接地調査報告書』平成3年3月（1991）

図　　版

遺跡の現状〈西側より〉

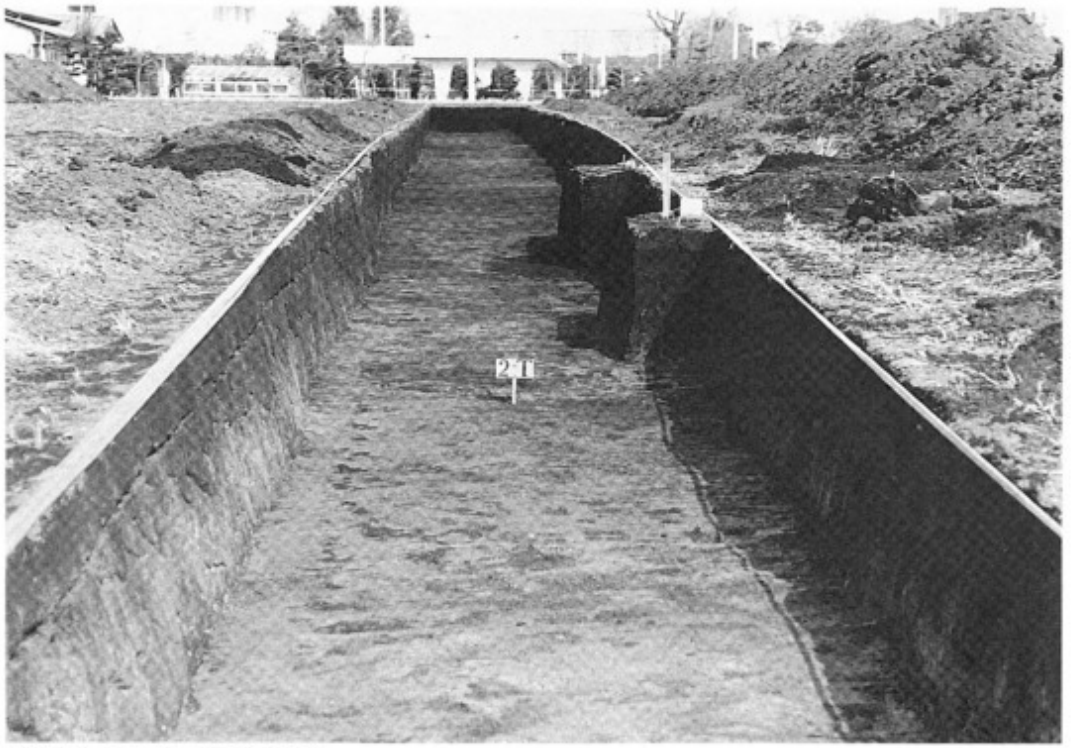
遺跡の現状〈東側より〉

第１トレンチの発掘状況〈西側より〉

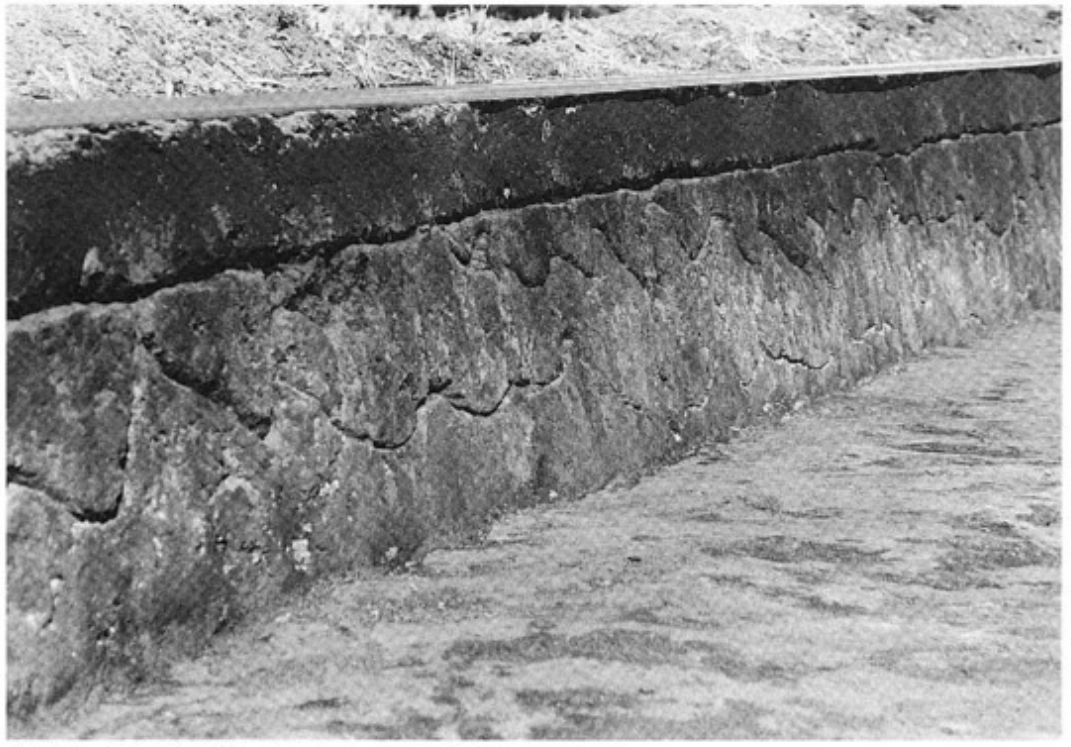
第３トレンチの発掘状況〈西側より〉

第1トレンチ全景〈西側より〉

第1トレンチ第4区A－Bセクション土層断面〈南西より〉



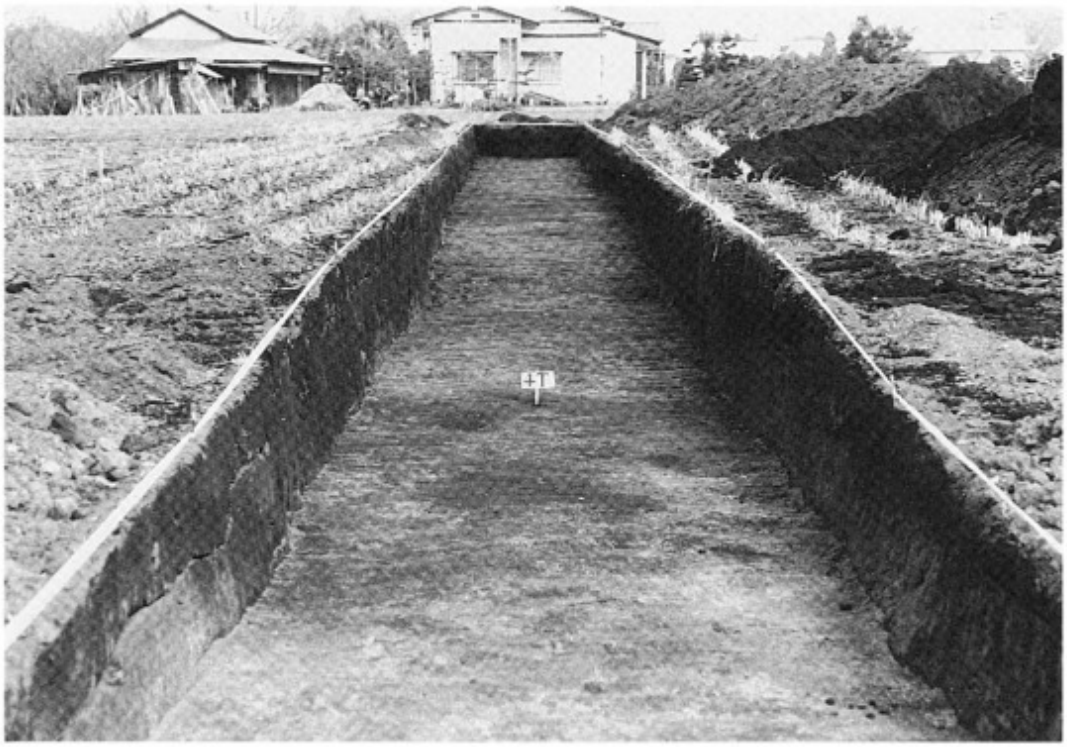
第２トレンチ全景〈西側より〉



第２トレンチ第１区Ｃ－Ｄセクション土層断面〈南西より〉

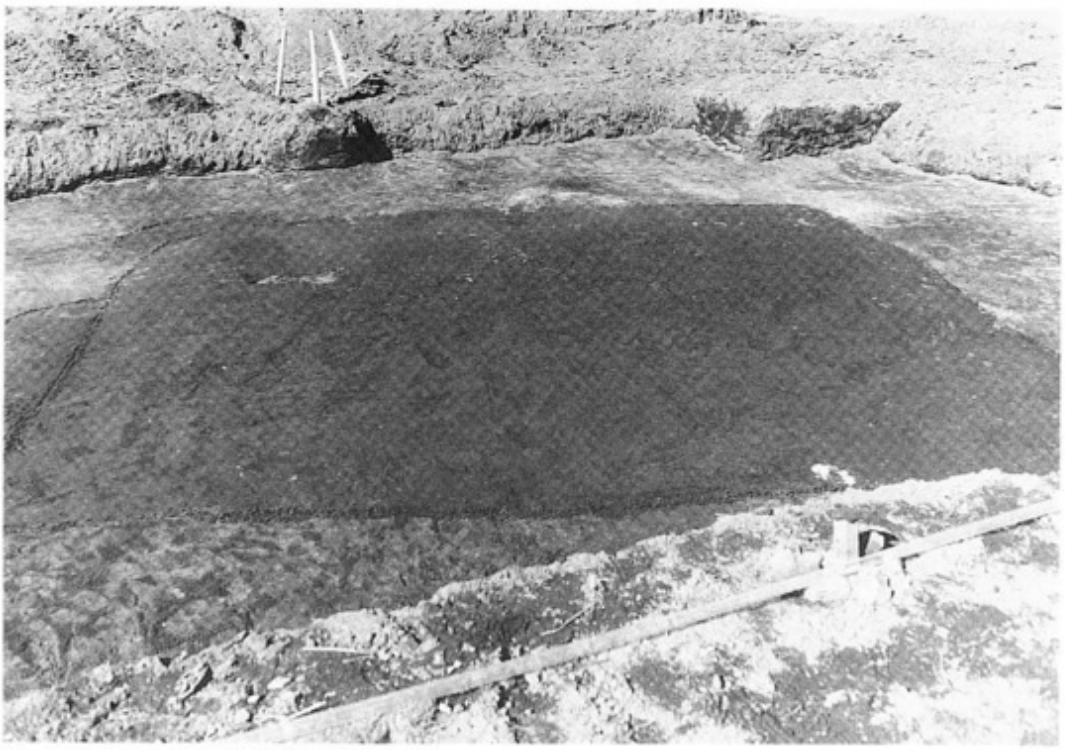
第３トレンチ全景〈西側より〉

第３トレンチ第５区Ｉ－Ｊセクション土層断面〈南西より〉

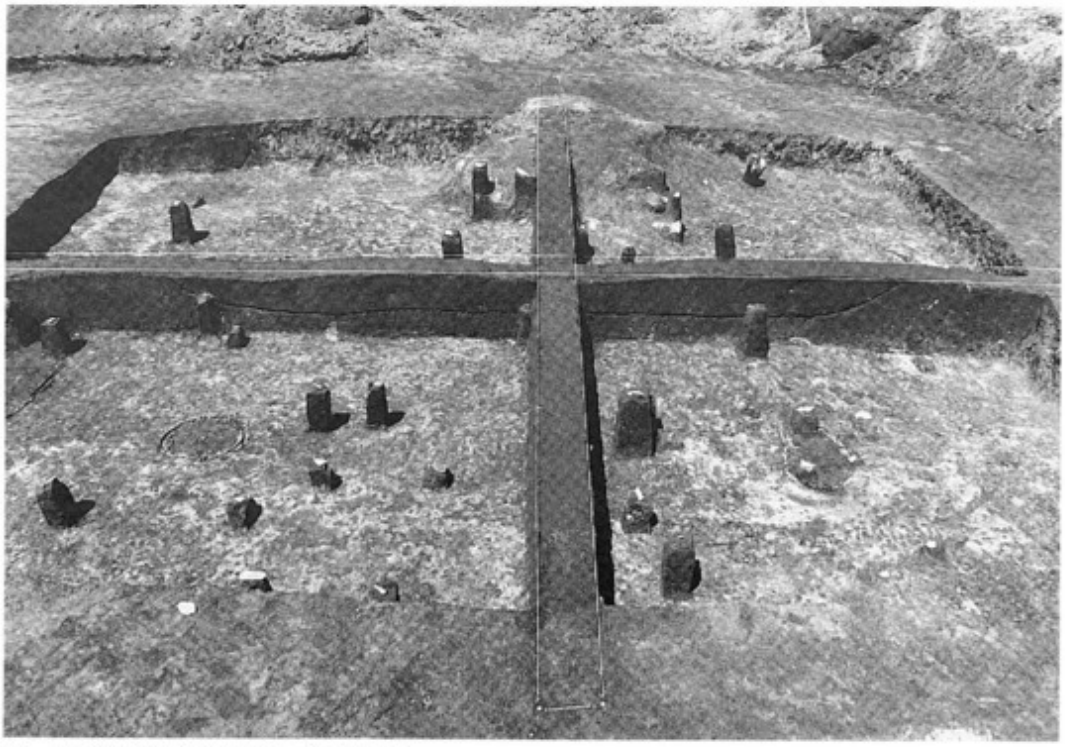


第4トレンチ全景〈西側より〉

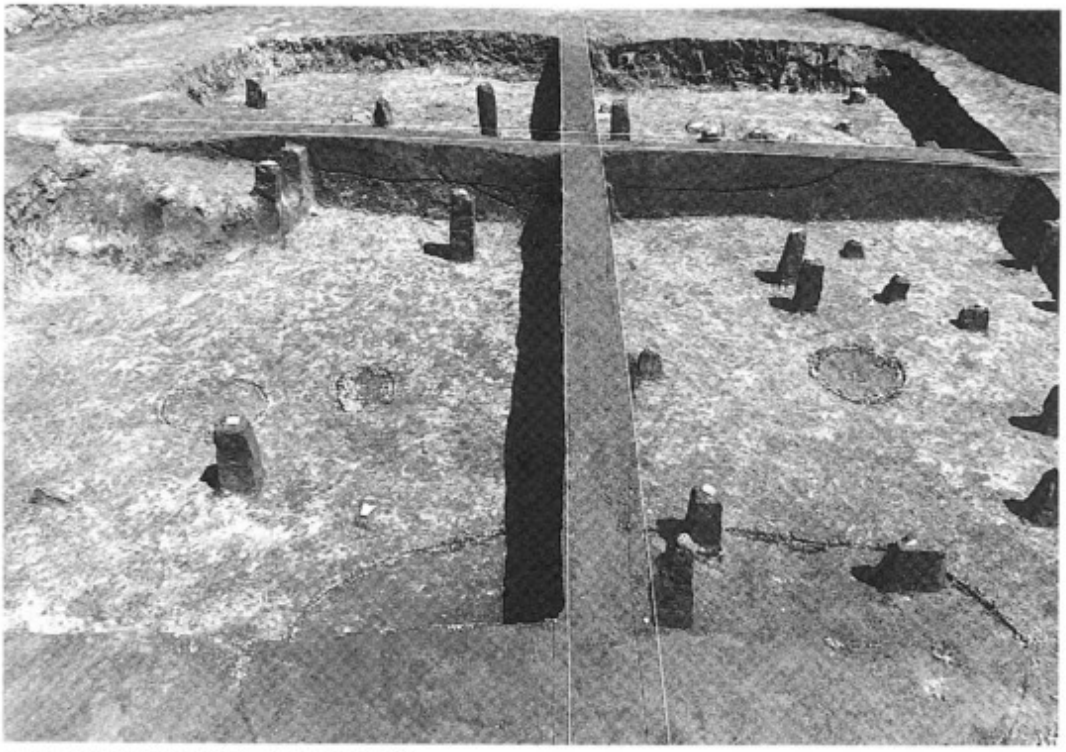
第4トレンチ第3区K－Lセクション土層断面〈南西より〉



第一号住居址プラン確認状況〈南側より〉

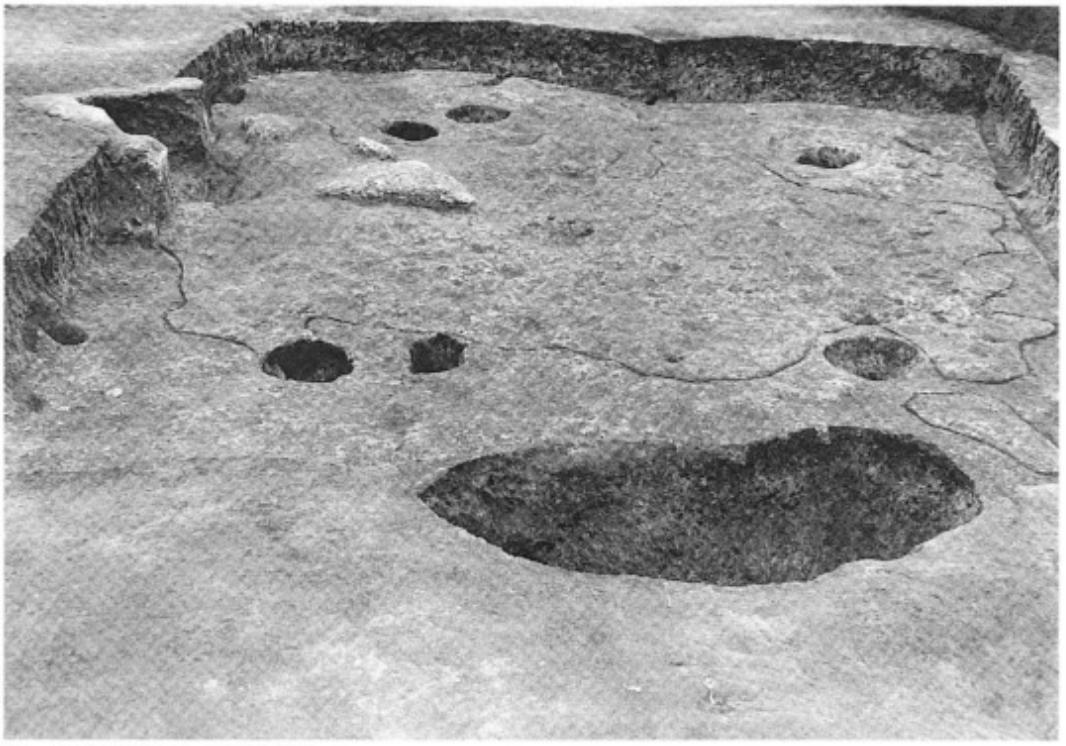


第一号住居址遺物出土状態〈南側より〉

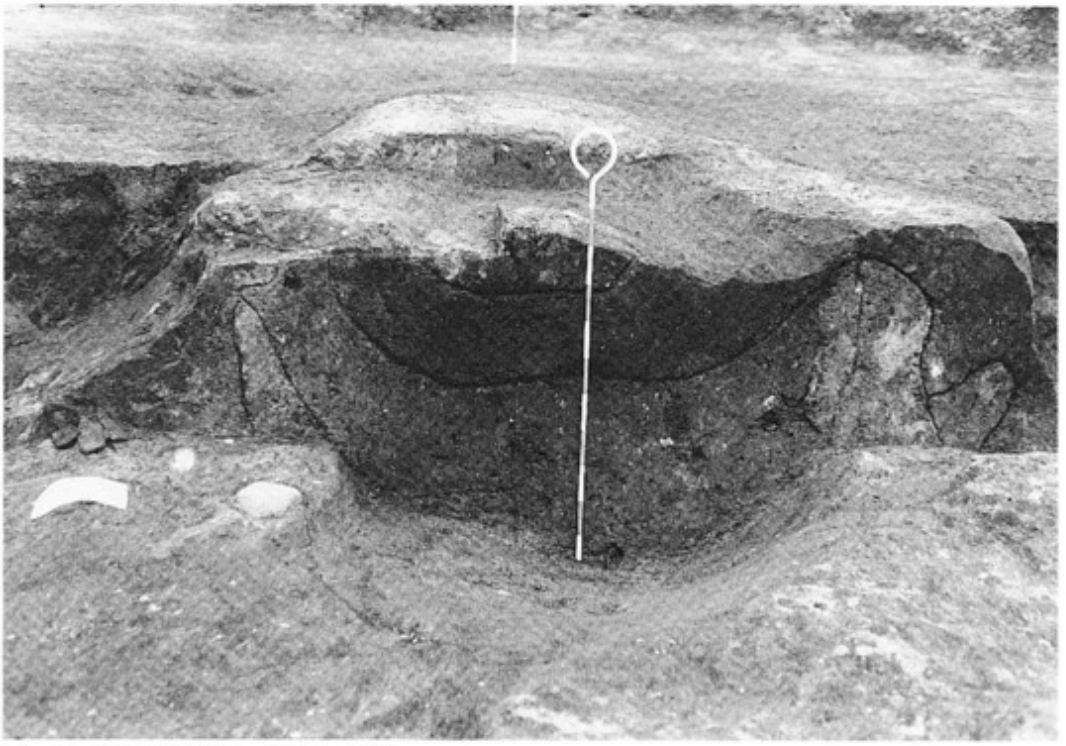


第一号住居址遺物出土状態〈西側より〉

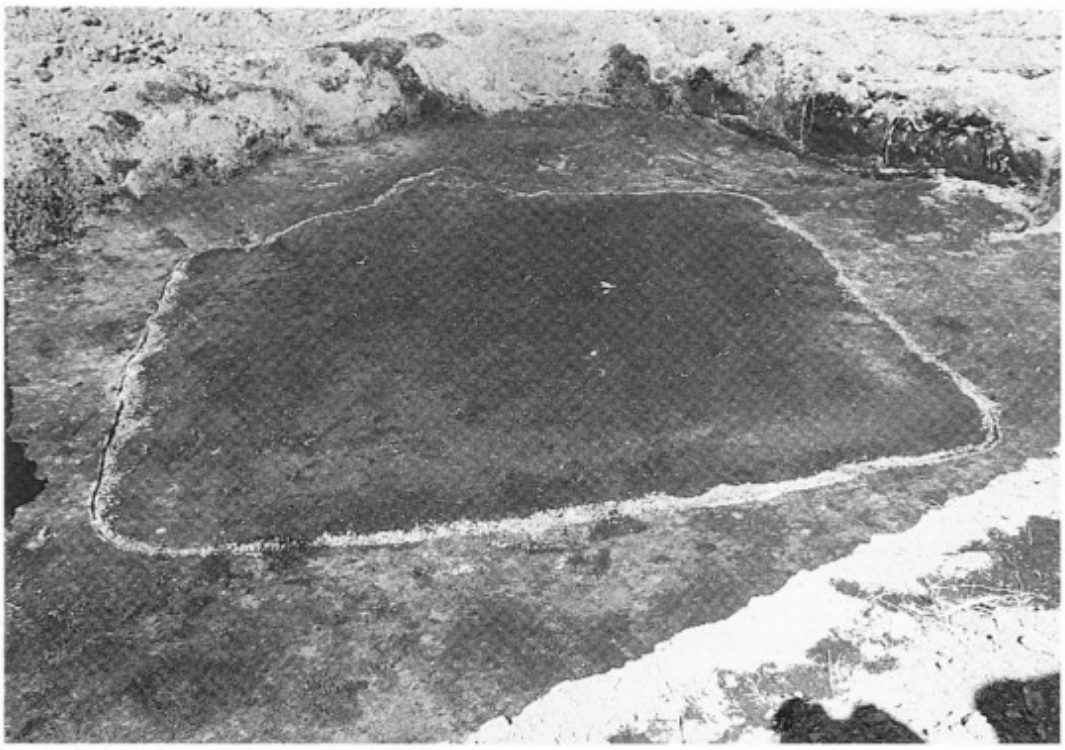
第一号住居址全景〈南側より〉



第一号住居址全景〈西側より〉



第一号住居址カマド断面〈南側より〉



第二号住居址プラン確認状況〈南側より〉

第二号住居址発掘調査風景〈南側より〉

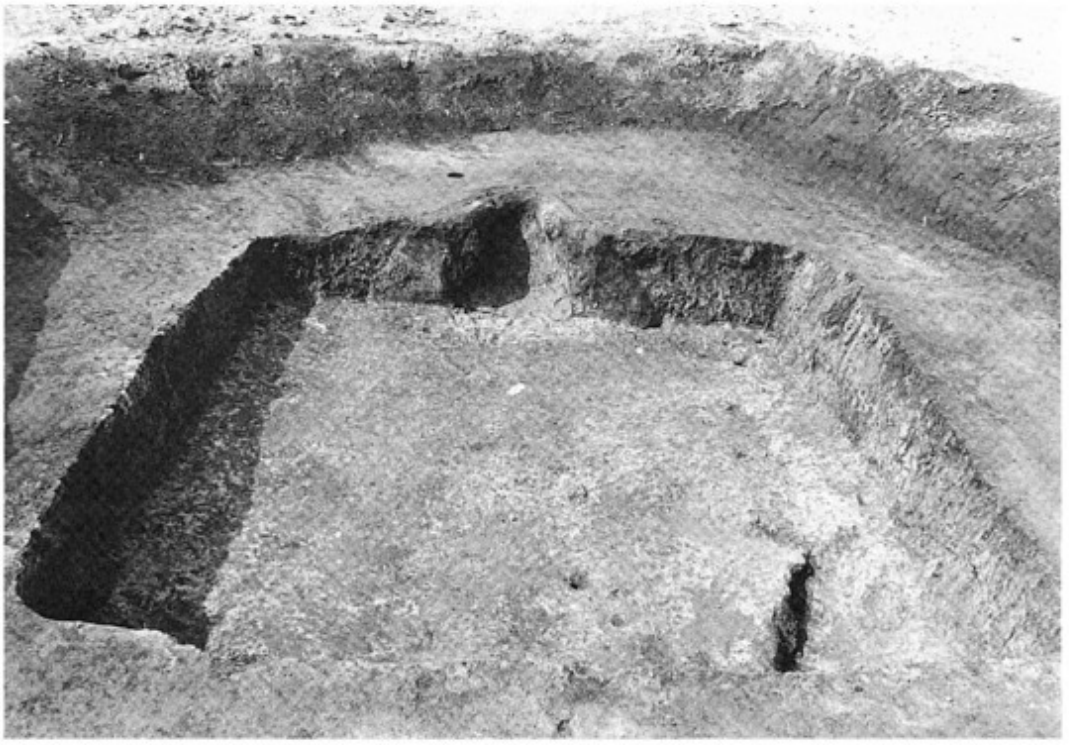
第二号住居址遺物出土状態〈西側より〉

第二号住居址カマド西側遺物出土状態〈西側より〉

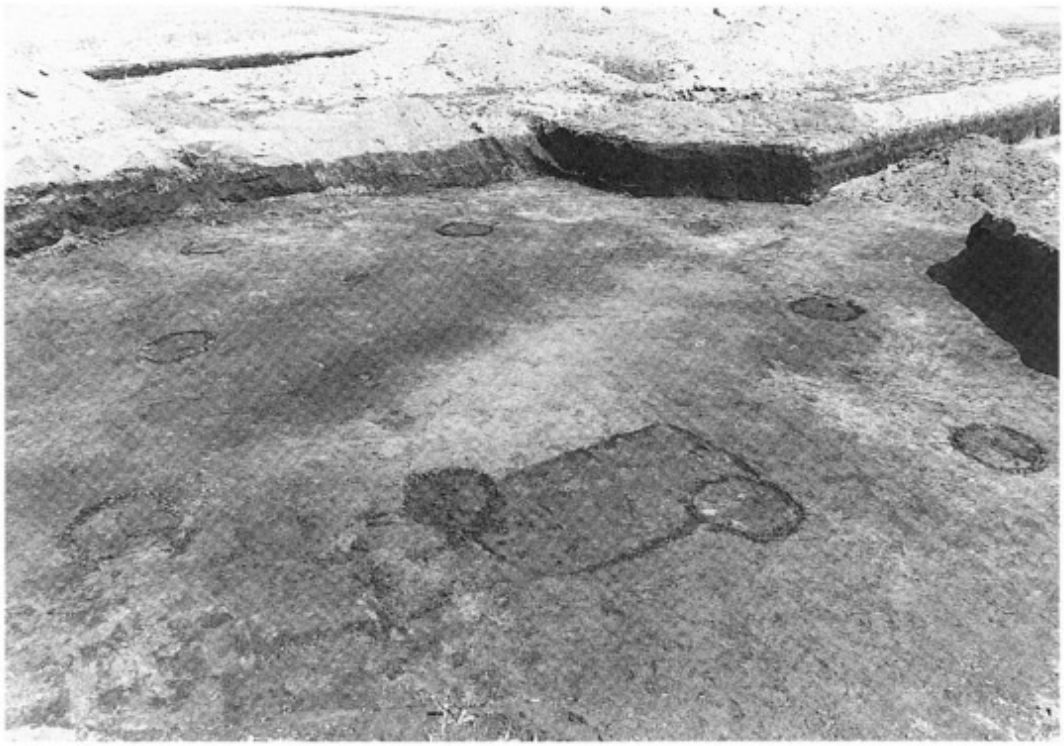
第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉

第二号住居址カマド断面〈南側より〉

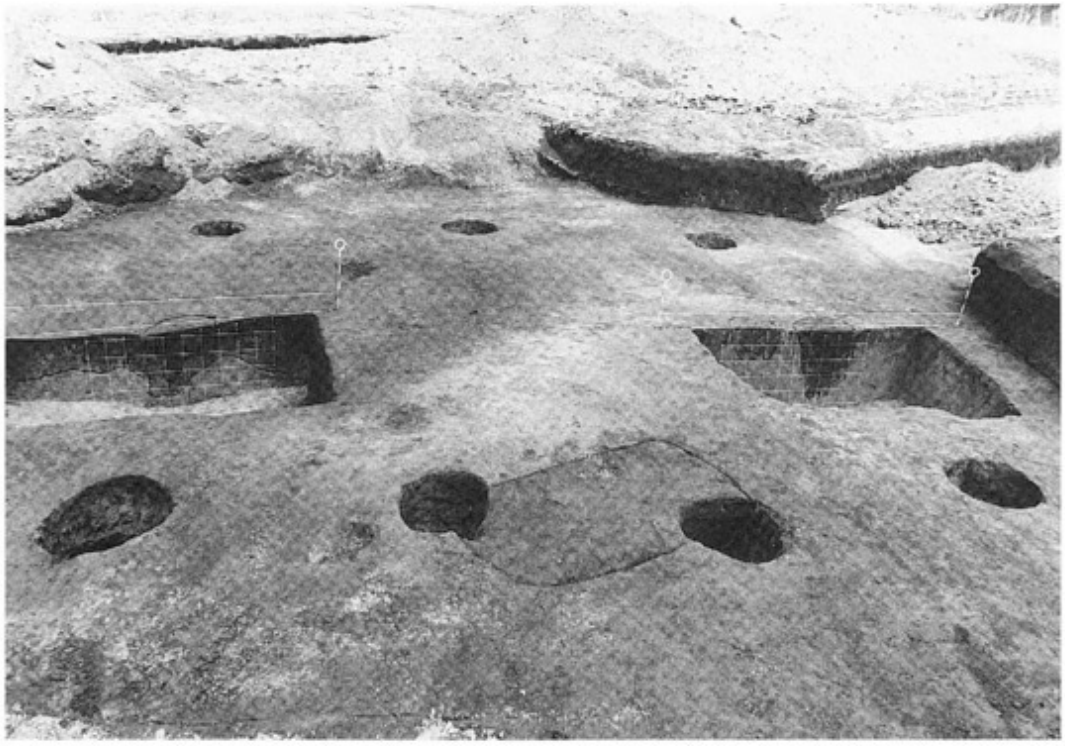
第二号住居址遺物出土状態



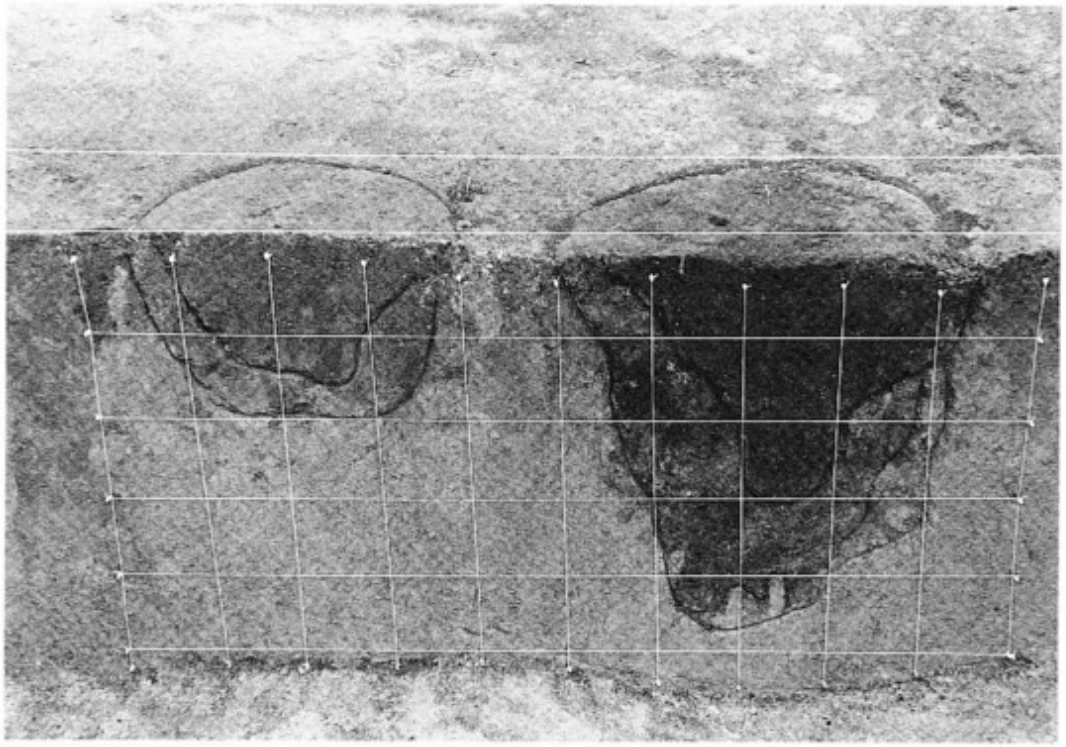
第二号住居址全景（南側より）



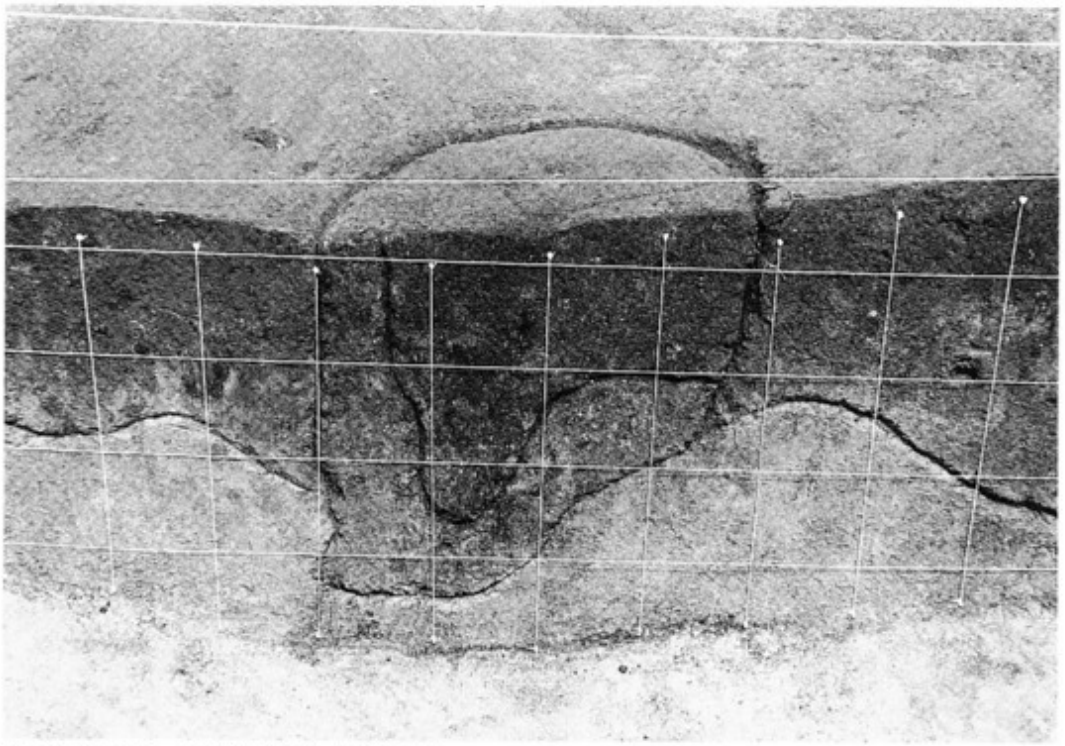
掘立柱建物跡検出状況〈南側より〉



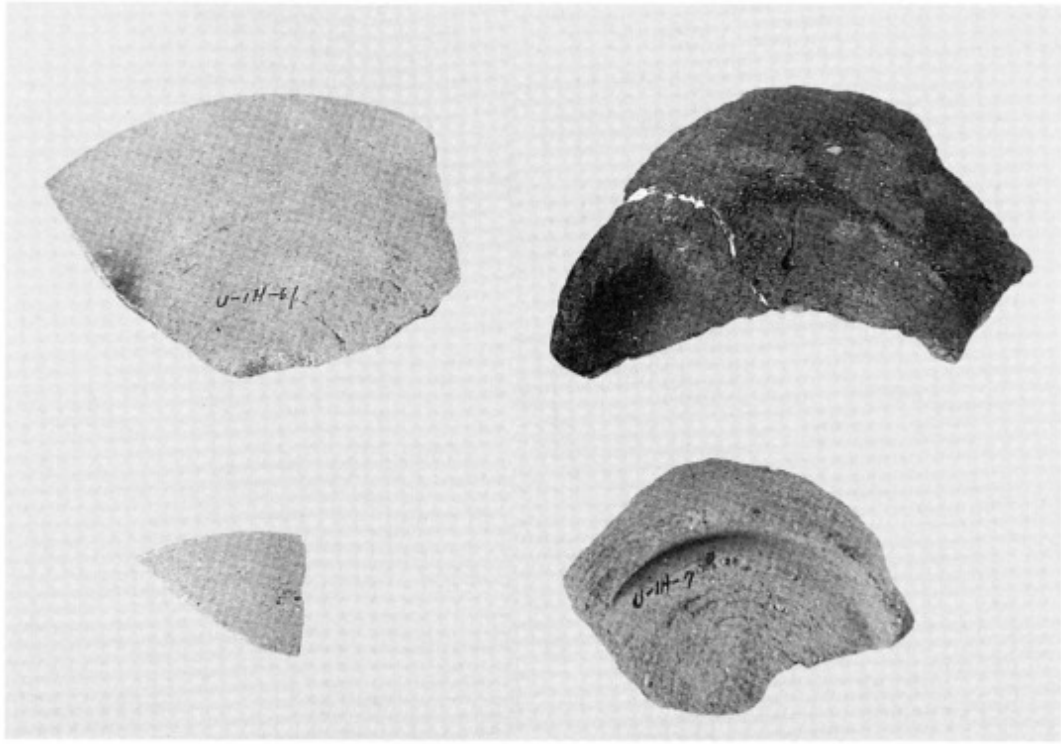
掘立柱建物跡柱穴発掘後の状況〈南側より〉

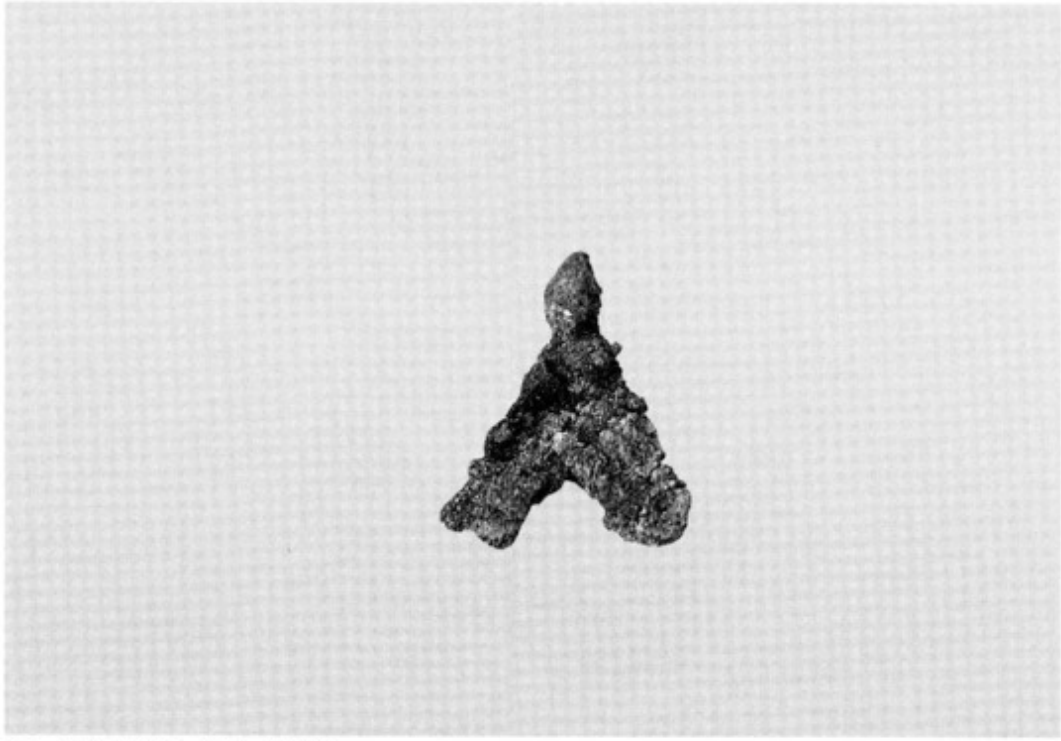


掘立柱建物跡P_4（右），P_5（左）半截発掘断面〈南側より〉

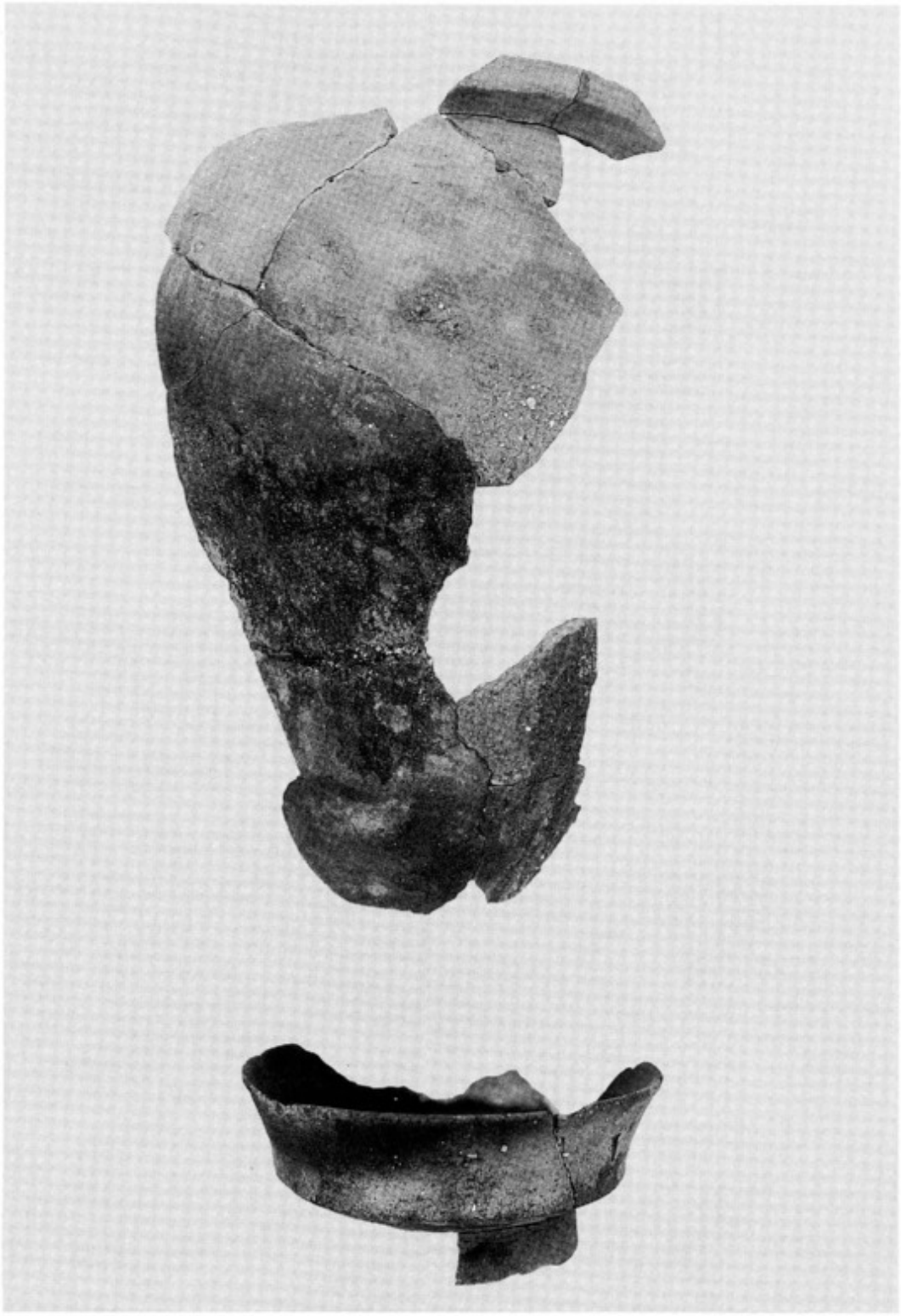


掘立柱建物跡P_{10}半截発掘断面〈南側より〉



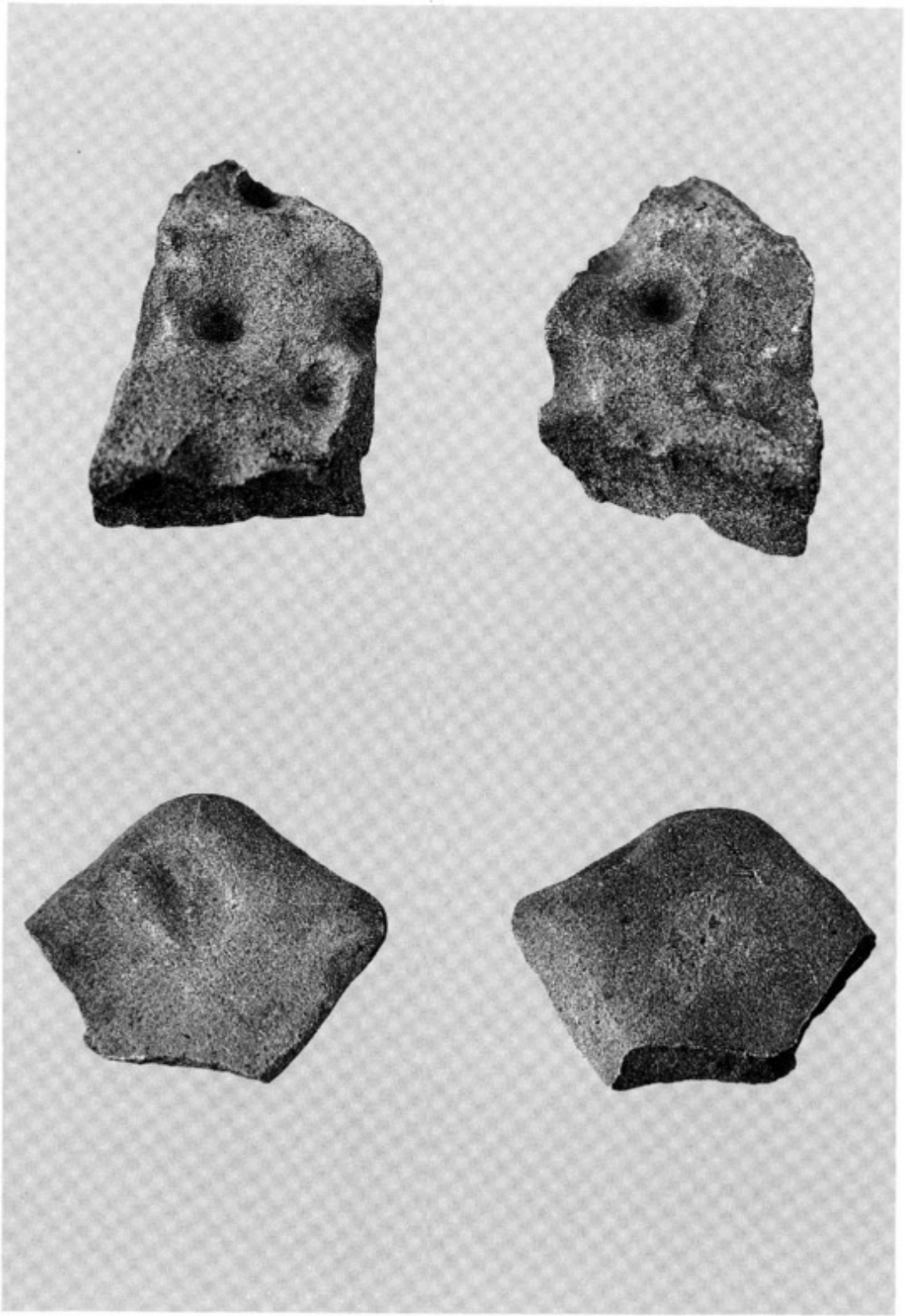


第一号住居址出土土器・鉄製品



第二号住居址出土土器（一）

第二号住居址出土土器（二）



第二号住居址出土石器

発掘調査従事者

調査主任　千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）

補佐員　水谷　正　飯島栄子

作業員　中橋みつ子　小野瀬とみ江　小野瀬幸子

山本つる　小野瀬たま江

遺物整理・報告書作成従事者

千種重樹　遺構図面の整理検討，土器・石器・鉄製品の実測図および拓影図の作成，トレース，写真図版の作成，本文執筆．

飯島栄子　遺物の水洗いおよび注記，接合資料の抽出，土器接合作業．

田村みどり　遺構図面および土器実測図のトレース，記号・番号の貼付

謝　辞

姥賀遺跡の発掘調査記録が上梓されるにあたり，発掘から遺物整理が終るまで，大宮町教育委員会，株式会社国際ブライトの方々からあたたかいご高配とご協力を賜ったことに対し，深い感謝の意を表する次第である．また地元作業員の方々の真摯で意欲的なご協力にもあらためて謝意を表したいと思う．

姥賀遺跡

平成4年1月
編集　千種重樹
発行　大宮町教育委員会
印刷　ワタヒキ印刷株式会社